

## 資料紹介

## 旧百崎家住宅蔵石丸安世家書簡文書

——幕末佐賀藩士の書簡十二通——

多 久 島 澄 子

## はじめに

二〇一八年一〇月一六日の午後の事であった。佐賀藩士石丸虎五郎（安世）<sup>①</sup>宛の書簡を、佐賀市水ヶ江横小路の旧百崎家住宅（国の登録有形文化財）<sup>②</sup>で発見した。その日は、常照院見学の案内を、旧蹟に詳しい南里早智子氏に頼んでいた。その帰途、南里氏から「石井長庵縁の家にも寄ろうか」と誘われ旧百崎家住宅を初めて訪れた。先に玄関を上った南里氏が「石丸安世が」と筆者を呼ばれ、目にしたのが江藤又蔵（新平）<sup>③</sup>と石丸虎五郎（安世）の名前で、南里氏が読まれたのは大木喬任書簡の宛名、石丸安世であった。下部は物陰で見えなかった。

石丸安世は慶応元年イギリスへ密航留学し、明治四年に工部省初代電信頭となり、明治六年二月、東京・長崎間の電信開通を成し遂げた人物で、又蔵と虎五郎は共に天保五年生れである。

後日調べた結果、一二通の書簡が屏風に貼られていた。所有者の服部康喜・服部八重ご夫妻を交え、大園隆二郎・古川英文・藤井祐介・三ツ松誠・山口久範・碓美也子・山口佐和子・多久島澄子の一〇名で解読会が発足した。詳細は、別表1の通りである。

本稿の一節では、百崎家の由来をたどり何故石丸家書簡文書が百崎家に

伝わったのか推量した。二節では資料の翻刻を著し、三節で石丸安世を中心に資料解説を行った。百崎と百崎の表記については、国と県の認定証を表わすときのみ百崎とし、他は百崎に統一した。

## 一、百崎家と石井家

## (一) 「西海日記—勇魚取り」から

百崎家の歴史については、旧百崎家住宅の現当主服部八重氏の父親、岸川雅俊（大正一三年生）氏が昭和五八年（一九八三）、九州大学医学部外科第一講座同門会誌に「西海日記—勇魚取り」<sup>④</sup>（以下、「西海日記」と略す）を発表されている。この「西海日記」は、岸川氏の祖父に当たる百崎知親（天保八年～明治二六年）の日記が底本と思われる。というのも、服部八重氏が百崎知親の日記を基に岸川雅俊氏が「西海日記」を書き上げたのを目撃している。現在のところ原本は確認できていないが、百崎家のどこかにあるはず（服部八重氏談）とのことである。

「西海日記」巻頭ページに載っている和本（写真A）表紙は「明治廿壹年一月ヨリ／日誌／五島捕鯨會社／百崎知親」と読める。これが「西海日記」の底本である百崎知親の日記であろう。

以下は「西海日記」を典拠に百崎家のことを多久島が書いた。

別表1 石丸安世家書簡文書研究会

◎第一回開催 平成31年4月27日(土) 10:00~12:00 佐賀城本丸歴史館会議室

◎第二回開催 令和元年5月25日(土) 13:30~15:30 赤松公民館

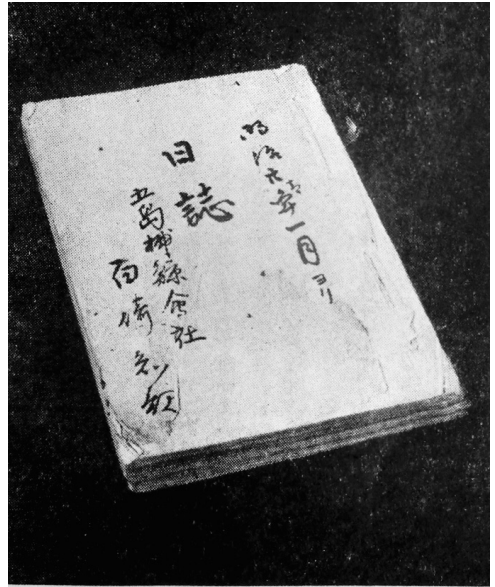
◎第三回開催 令和元年6月22日(土) 13:30~15:30 赤松公民館

◎会員

	氏名	所属	文書番号
1	大園 隆二郎	佐賀歴史研究会	No.10
2	古川 英文	佐賀城本丸歴史館	No.2 No.5
3	藤井 祐介	佐賀城本丸歴史館	No.3 No.7
4	三ツ松 誠	佐賀大学地域学歴史文化研究センター	No.4 No.12 No.13
5	山口 久範	佐賀県立図書館	No.1 No.9
6	山口 佐和子	佐賀市文化振興課歴史文献調査専門	No.11
7	碓 美也子	佐賀歴史研究会	No.6
8	服部 康喜	旧百崎家住宅(国登録有形文化財)	
9	服部 八重	旧百崎家住宅(国登録有形文化財)	
10	多久島 澄子	佐賀歴史研究会:事務局	No.8

※服部家所蔵の書簡12通(但し江藤又蔵書簡はNo.7とNo.1と担当者2名)を読みました。

- 第一回の担当者 古川英文、No.2、副島種臣(次郎)から石丸安世(虎五郎)、長森敬斐(傳次郎)宛書簡  
 藤井祐介、No.3、武富定保(文之助)から向井次郎宛書簡  
 三ツ松誠、No.4、前山清一郎から向井次郎宛、石丸十作宛書簡  
 三ツ松誠、No.13、千住大之助、横山平兵衛、古川與一から石丸虎五郎宛書簡  
 山口久範、No.9、伊東外記から石丸嘉右衛門宛書簡  
 多久島澄子、No.8、大木喬任から石丸安世宛書簡
- 第二回の担当者 藤井祐介、No.7、江藤又蔵(新平)から前半部分(石丸虎五郎宛)  
 山口久範、No.1、江藤又蔵(新平)後半部分(石丸虎五郎宛)  
 山口佐和子、No.11、佐野寿左衛門(常民)から石丸虎五郎・馬渡八郎宛
- 第三回の担当者 古川英文、No.5、(古賀)一平から(石丸)虎五郎宛  
 碓美也子、No.6、空閑(次郎八)・島(團右衛門)から石丸(虎五郎)宛  
 大園隆二郎、No.10、枝吉空助(神陽)から石丸虎五郎宛  
 三ツ松誠、No.12、本島藤太夫から石丸虎五郎宛



日 誌  
明治21年（明治20年度）  
五島捕鯨会社，百崎知親

写真A 九州大学医学部外科第一講座  
『同門会誌』18巻、岸川雅俊  
「一西海日記一勇魚取り」22頁所載

明治一七年（一八八四）春、知親は「今回設立の五島捕鯨会社、邦家発展の為、出資参加を懇願申上候」と書かれた「前の長崎県会議長（明治十一年の府県会規則）小城藩出身松田正久殿（後に衆院議長司法大臣、男爵）の至急便を手にした」。「追いつけるようにして、八太郎殿（大隈重信）から文が着いたのは、これも鯨組肝煎り衆から東京へ根回ししたからに違いない。東北へ十丁、天保九年（一八三八）会所小路に生れた八殿は、亡き江藤新平殿の四歳下、知親の一歳下で、物理的な意味では竹馬の友だが、「乱」<sup>11</sup>当時郷里の苦難を他所に、独り廟堂に留った当人に対しては、今も些かのわだかまりがある」と鯨組参加の顛末が書かれている。

百崎知親は、大隈八太郎（重信）を一歳下と言っているの、天保八年（一八三七）生れである。大隈家から見た百崎家は南西一〇丁（約1km）の場所となる。知親と八太郎は竹馬の友と言う。

意を決した知親は、幾ばくかの現金・明治九年交付の家禄公債・東与賀の田地九反・牛津の粉ひき場の権利を処分し、千円を捻出して鯨組に参加

した。<sup>12</sup>明治二〇年（一八八七）晩秋、庶務担当を要請された知親は五島灘を渡り有川の五島捕鯨会社に赴任した。

知親は明治一三年（一八八〇）、一人娘のトヨに旧藩医石井長益の二男次郎助<sup>13</sup>を婿養子に迎えていた。トヨと次郎助の間に、欽一<sup>14</sup>、ハマが生れ、知親の五島在勤中に一夫が生まれた。

知親の先祖は天正一二年（一五八四）、龍造寺隆信が島原で落命の砌、総崩れを防いだ殿軍に所属していた功で、二八〇年間、三〇石をいただいてきた。知親は明治四年一月、直正御逝去の際、かつて、御納戸役末端であったため、見事な銀煙管を形見として頂戴した。それは五節句のさまを巧みに彫ったものであった。

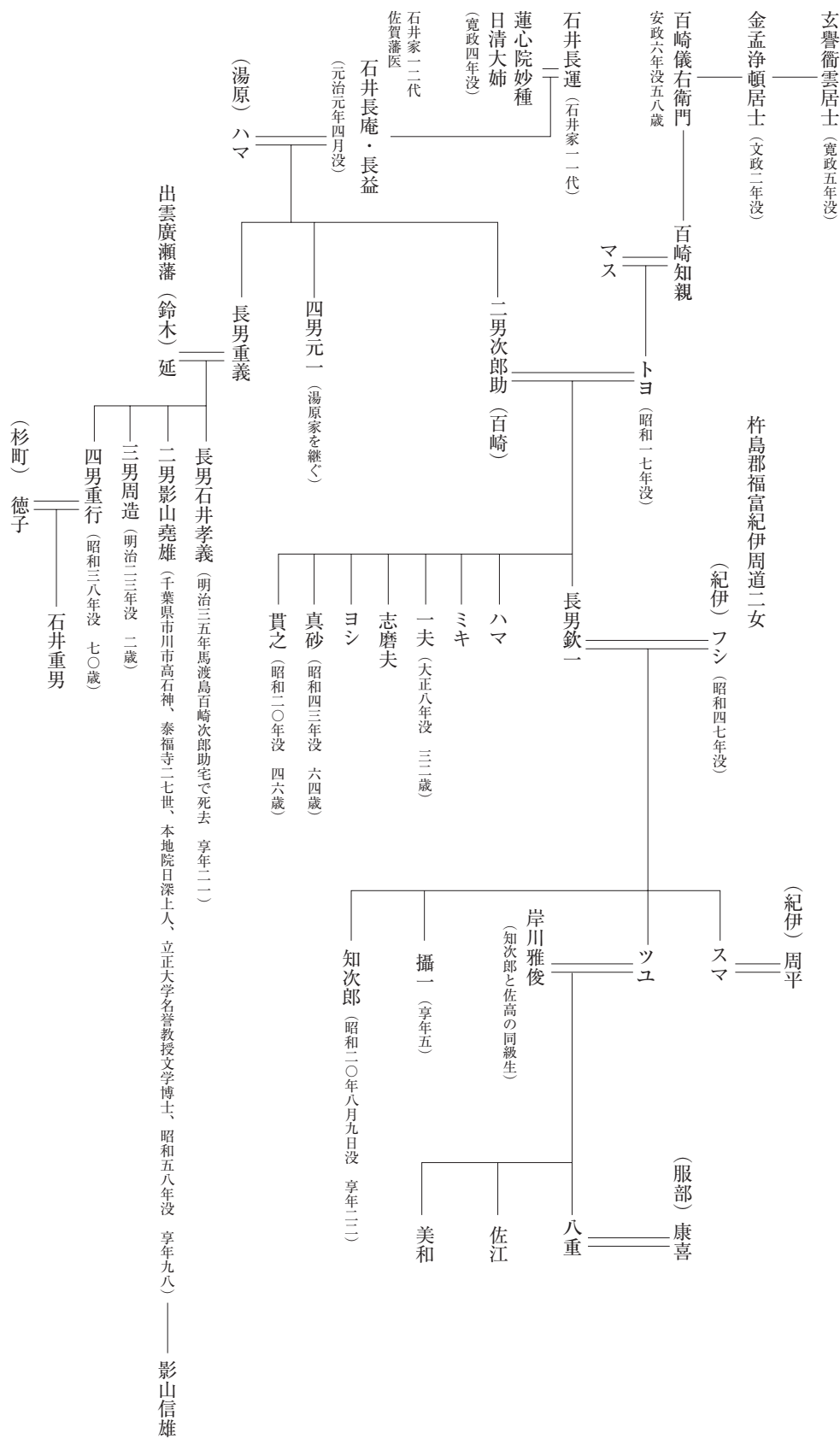
明治二一年七月一日、漁期が終り、知親は有川を発した。一二日、長崎東中町六番地に副島信太郎<sup>15</sup>を訪問し久闊を叙し、一三日午後六時、長崎港で乗船した源丸は、島原、百貫<sup>16</sup>を経て諸富津に着船した。人力車で帰宅したのは七月一四日であった。この年の正月から、隣の大崎小路に診療所<sup>17</sup>を持った次郎助夫婦が出迎えた。百崎知親は、明治二六年（一八九三）死去した。五七歳であった。

百崎次郎助の兄石井重義の孫、影山信雄氏所蔵の「石井家系譜写」<sup>18</sup>によれば、石井家は龍造寺隠岐守藤原家貞を初代として次郎助の父石井長庵藤原胤章は一二代目に当る。八代目石井藤原自伯（旧姓名、石井卜庵）から医道を家業とした。九代目石井長運藤原胤倫の時から佐賀藩藩医となり、次郎助の兄一三代石井重義まで続いた。

百崎家と石井家の関係は別表2の系図に示した。

別表2 百崎家略系図

服部八重氏聞取りと以下の資料から多久島澄子が作成した。「石井家系譜写」(千葉県市川市高石神泰福寺影山信雄蔵) / 影山堯雄作成「過去帳」(影山信雄所蔵) / 岸川雅俊著「西海日記―勇魚取り」『九州大学医学部外科第一講座同門会誌』第十八巻、一九八三年) / 百崎家潮音寺墓石 / 百崎家戒名札 / 影山信雄氏書簡。



石井家の墓は佐賀市本庄町鹿子常照院にあったが、平成八年十二月に佐倉へ移葬された

別表3 石丸安世家書簡文書関係者一覧

多久島澄子作成

氏名	享年
向井次郎作	不明 1866：慶応2年8月16日（小城日記に在）
伊東外記（次兵衛）	1890：明治23
武富文之助（定保・圀南）	1875：明治8
本嶋藤太夫	1888：明治21
横山平兵衛	不明 1868：慶応4年閏4月12日（佐賀藩幕末関係文書調査報告書に在）
古川與一	1871：明治4
千住大之助	1878：明治11
石丸十作（嘉右衛門）	1884：明治17
枝吉神陽（空助）	1862：文久2
島義勇（團右衛門）	1874：明治7
佐野常民（寿左衛門）	1902：明治35
前山清一郎	1896：明治29
副島種臣（次郎）	1905：明治38
空閑次郎八	1862：文久2
古賀定雄（一平）	1877：明治10
大木喬任（民平）	1899：明治32
長森敬斐（傳次郎）	1902：明治35
江藤新平（又蔵）	1874：明治7
石丸安世（虎五郎）	1902：明治35
鍋島直正	1871：明治4
百崎知親	1893：明治26
大隈八太郎（重信）	1922：大正11

(二) 服部家聞き取り

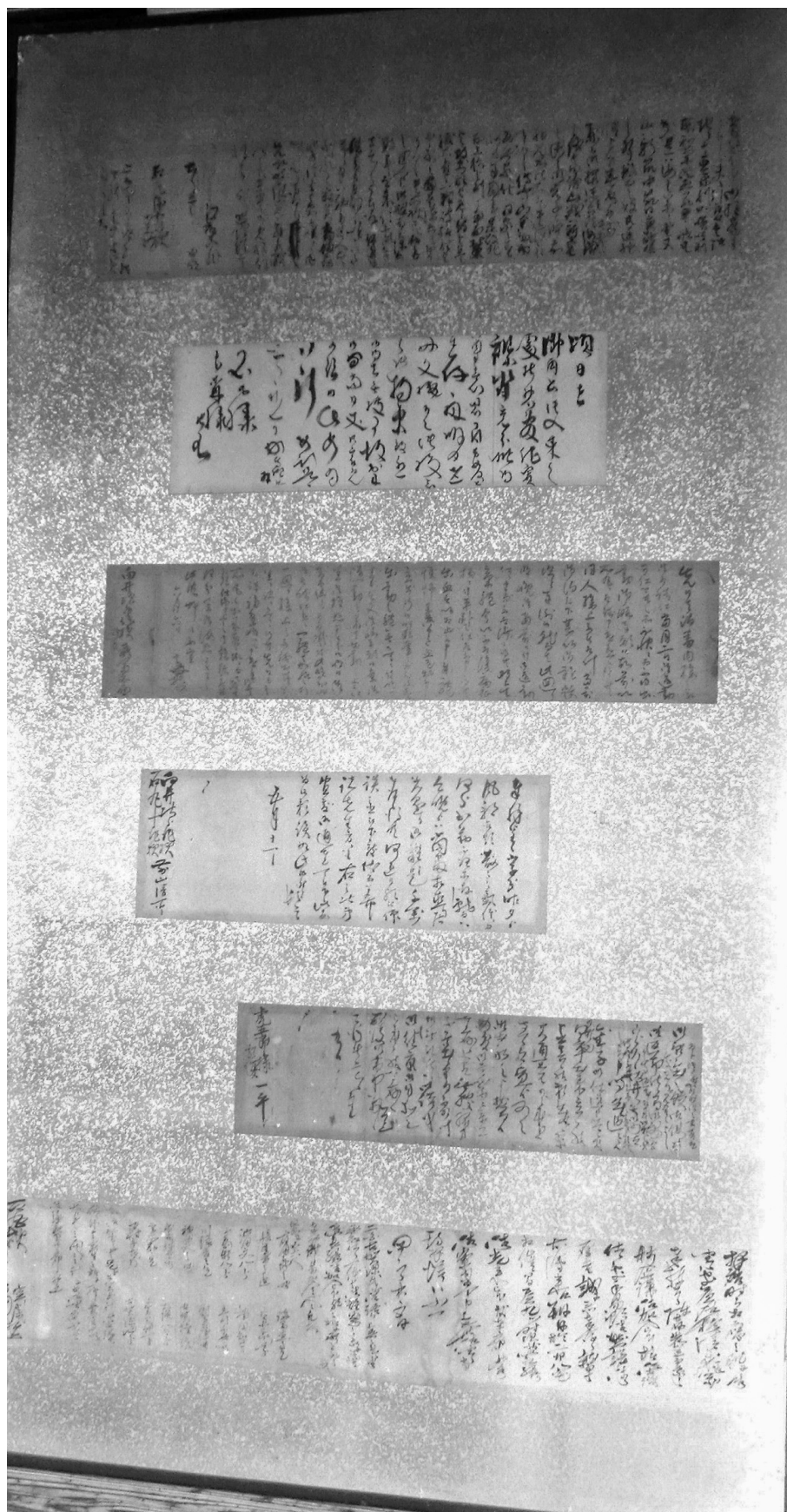
旧百崎家住宅（水ヶ江横小路三丁目）は、百崎欽一（一八八〇～一九五五）が、或る未亡人より買い取って大正三年（一九一四）に百崎医院を開業し、家族の増加に伴い離れを増築した。建物はその後欽一と同様開業医となった娘婿の岸川雅俊が百崎医院とともに受け継ぎ、岸川雅俊の長女である服部八重氏が現在の所有者である。名称を「旧百崎家住宅主屋」として二〇一六年、国の登録有形文化財に指定された。二〇一九年一月、次の認定証が佐賀県から届いた。「認定証／旧百崎家住宅／22世紀に残す佐賀県遺産として認定します／認定日令和元年11月5日／認定番号第2019-1号／佐賀県」（服部八重氏所蔵）。

石丸家の書簡文書が貼られた屏風については、服部八重氏は母親ツユ氏から何も聞いたことが無いという。ということは、ツユ氏の父親欽一氏の代に入手したものは無く、知親が入手したのであろうか。

二、資料翻刻

【凡例】

- 一、補った箇所は（ ）で示した。
- 一、固有名詞は原文のまま表記し他は通行の字体とし、適宜句読点を施した。
- 一、追伸が文頭の行間に書かれたNo.5は、追伸分をゴシック体にした。
- 一、書簡の作成年が比定できる場合には（ ）を付けて示した。
- 一、便宜上、書簡に番号（1～13）を付した。順序は写真B・Cに示した。
- 一、最初に書簡文書番号7をもってきたのは書簡文書番号1の前半分に当たるためである。



No.1  
江藤又蔵（胤雄）から  
石丸虎五郎あて  
No.7の続き  
7月21日

No.2  
副島種臣から  
石丸（安世）・長森（敬斐）あて  
3月27日

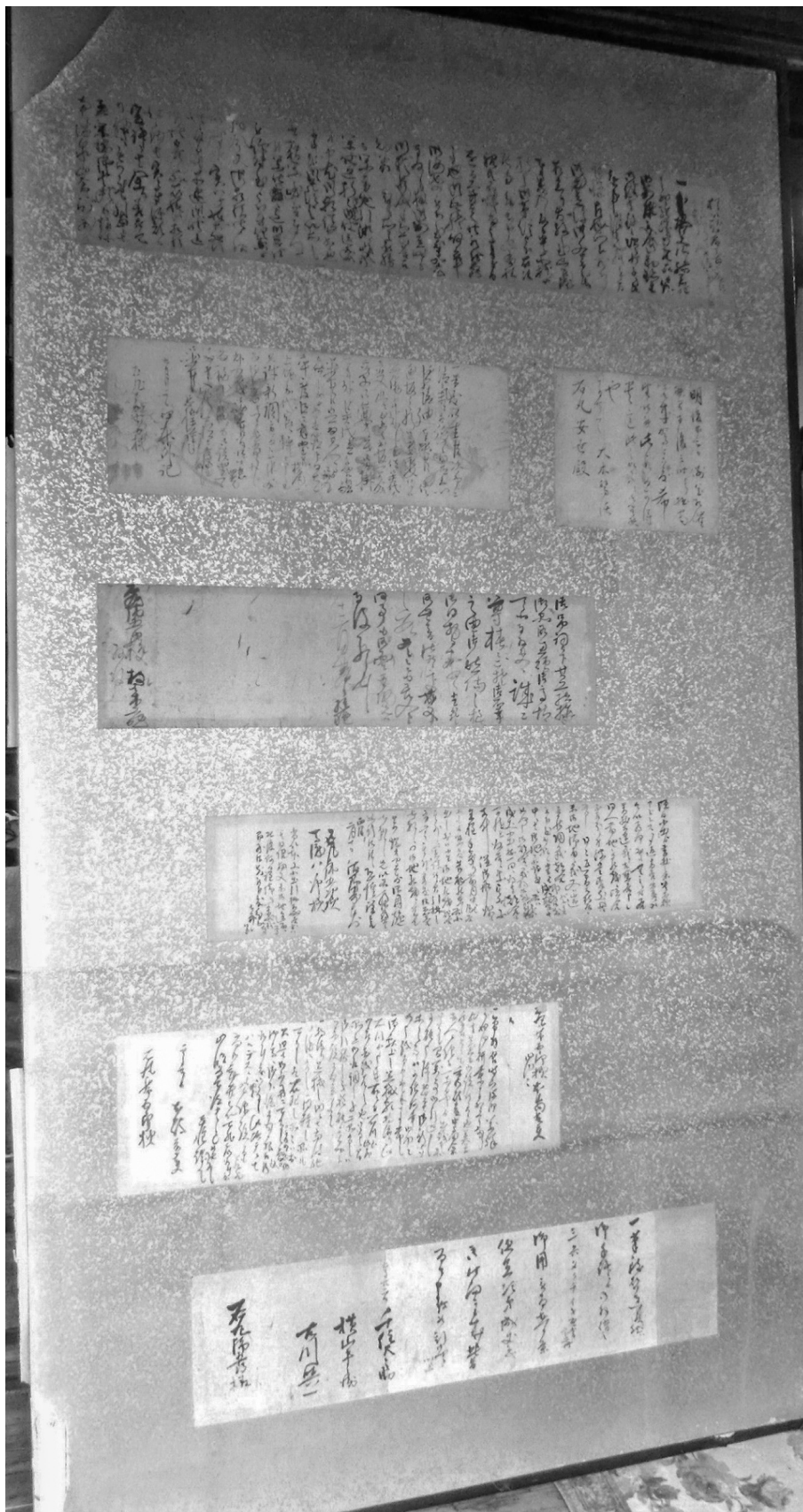
No.3  
武富文之助から  
向井次郎作あて  
6月6日

No.4  
前山清一郎から  
向井次郎作・石丸十作あて  
5月11日

No.5  
古賀一平から  
石丸虎五郎あて  
（安政6年）4月9日

No.6  
空閑（次郎八）・島（團右衛門）から  
石丸（虎五郎）あて  
4月25日

写真B 旧百崎家所蔵石丸安世家書簡12通（No.1はNo.7の続き）



No.7  
江藤又蔵（胤雄）から  
石丸虎五郎あて  
No.1へ続く

No.8  
大木喬任から  
石丸安世あて  
10月21日

No.9  
伊東外記から  
石丸嘉右衛門あて  
9月2日

No.10  
枝吉左助（経種・神陽）から  
石丸虎五郎あて  
（安政4年）12月29日

No.11  
佐野寿左衛門から  
石丸虎五郎・馬渡八郎あて  
1868年（慶応4＝明治元）2月10日  
（月曜日）

No.12  
本島藤太夫から  
石丸虎五郎あて  
（文久元年）2月20日

No.13  
千住大之助・横山平兵衛・古川與一  
から  
石丸虎五郎あて  
6月22日

写真C

〔石丸安世家書簡文書番号7〕（担当 藤井祐介）

猶以轉殿・壽一殿江も

よろしく被仰置被下度

奉希候、以上

一筆啓上仕候、残暑殊

之外難凌御座候処、倍

御安康被成御勤珍重

御儀奉存候、次ニ少子之儀

無事消光罷在候間、

乍憚左様思召可被下候、

御出立後御文ニ而も

相知り失敬之至思召之程

奉畏入候、反而貴所様より

折々御芳信被下、右御

返事も不申上有様、

親共不快ニ有之、旁辛勞

懸而奔走仕取紛、前断

之通御無礼何卒

御海恕被下置度、夫而已

奉存候、扱御出立時分

御頼相成候「三兵答古

知幾」之存も、右之取紛

ニ而写方延引、漸ク昨今

御宿元より

写仕廻折々御仕送相成

可被申、尤御相談申上候通

少子も御蔭を以右之

書籍写置度奉存

候付、写仕廻候迄御恩借

被仰付置被下度、任兼日、

扱今又御相談仕候儀

御座候、実ハケ様大延引

仕候付而は、早速御侘迄

可仕答之処、右様御相談

仕候儀は実ニ奉汗顔候、

爰許ニは余り差変

候儀も無御座候、引当りは

孟宗勝御火術力鍛鍊

南ニ温泉山鳥ハがあく

〔石丸安世家書簡文書番号1〕（担当 山口久範）

鳶ハパイくく御推察可

被下候、夫ニ引変其御

地ニは、亜米利加・暎咭利

期・和蘭陀・魯西亞之船共



出入、是ハ海之累之由、又

山ハ新筑(新筑後屋)・中筑(中の筑後屋)同夜歛娯

之声数(多ク)而之妓共連袖

情を含春色千万

貴所様ハ

兼而御探練之兵法、海戦

之儀は勿論、山戦ハ所其長

其術之御容子は眼前

拜見不仕こそ遺恨之至

奉存候、伝聞山本勘助

武田家二仕へ、同家之兵は

収る事数年、是故北

面上杓を制申候、南面北条

を攻、則旗を返シ鬪を直し

織右府を一戦二破、殆旌を

中原二建、是練兵之功と

奉存候、貴所様迄ニ西方

之佳人を御招有之、練兵

数年、近来信玄之御手きハ

さそくと奉存 何事も

後音を奉期候、唯々いた

ましきハ西方佳人君ニ

別れて寂莫、高坂・馬場

輩信玄を失而嘆クニ同

からんと奉存候、恐惶謹言

先以、時候御見舞方々戯

れの至、平ニ御免猶期

後音之時候 恐惶謹言

江藤又蔵

胤雄

(安政五年)

七月廿一日

石丸席五郎様

御直披

二白本文之次第御

無礼千万平御免

被下候 以上

【石丸安世家書簡文書番号2】(担当古川英文)

頃日は

御両公御入来之

処居悪敷他實

裸沓充分難得

尊意、思召も如何と

奉存候、扱明日は

好文楼にて御侍者

之御約束致遊

候得は、無拋事故出来

候間、当日丈御宥免

可給候、此段為

御断如斯御坐候、

三月廿七日 副島種臣

拜

石丸様

長森様

坐右

【石丸安世家書簡文書番号3】(担当藤井祐介)

先日は泊番内繰之義

御相談仕、当月二日御返勤

可仕筈之所、不快二而不得出

勤御暇奉願候故、前以

石丸へ相談申遣置候得共、

同人繰上不被相叶、当前

御泊被下、甚以御難題

深々奉謝候、就而は此廻り

明晩御当前二付御返勤

仕候半而不相濟候得共、野生

気体今以不相復、病症

柄二付平臥は仕居不申候得共、

出血今以相止不申、身体

憔悴甚敷、いまた血色も出不申、

立歩行候時々眩暈相発、迎も

出勤之体無御座二付、明日

より今又御暇奉願候条、御

返勤之義は出勤之上可仕、

宜御推恕可被下候、明日御

氣組二も可相掛二付、此段前以

御相談仕置候、一体は加様之折

一廻り繰上之示談出来候得は

宜キ訳ニ御座候得共、先日も其

相談福島始へも申遣置候得共、

石丸被出来兼候趣ニ而は如何共

難仕、弥ヶ上之御難題罷成、

何分宜御海恕可被下候、

此段草々不宣

六月六日 定保拝啓

(端裏書)

向井次郎作様 武富文之助

梧右

【石丸安世家書簡文書番号4】(担当三ツ松誠)

奉拝呈候、小子義昨夕より

風邪相煩散々之気体ニ而、

何分出勤不任所存、就而ハ

今晚よりハ当番相直り居

差懸り、御難題千万

奉存候得共、何れと歟被仰

談置被下度、伏而奉希候、

諸先生方へも右之次第

宜敷御通達可被下候、此段

為御頼談如此御座候、頓首

五月十一日

ノ

向井次郎作様

石丸十作様

前山清一郎

【石丸安世家書簡文書番号5】(担当古川英文)

尚以俊蔵へ御沙汰之未差遣

御預置之鯨御使ニ而

候處、先ツ見合候よし

御返却仕候間御受取

被申聞返却相成御頼候義

可被下候、坂井へ共御沙汰

埒明不申候、氣之毒ニ奉存候、

之旨申聞置候、追々ニハ

金子御仕送申上候ニ付、

御頼物

何卒出来立候様

申上呉候様頼置義候条

其通には可被成下候

さて今昼より又々

御出船之よし、惣而ハ

呋度御言葉ニ参上

奉存候へ共、無扨脇方

不罷出候はて不相叶

御無礼仕候、御詰中

御健康御自愛

被成候様奉存候、已上

副後御書中万々

可得貴意候、頓首

九日（安政六年四月九日）

ノ

虎五郎様 一平  
敬復

【石丸安世家書簡文書番号6】（担当碓美也子）

拜啓、時下相応之肌に御

坐候処、益御穆清被成御勤

奉抔賀候、陳は先達而我々

舫企講御加入被下候様御相談

仕候処、手易預御然諾御

厚志誠に忝奉存候、就而は

右会来ル朔日於二郎八宅

相催候間、昼九ツ時頃より御差繰り

御光来被下度奉希候、此段

御案内為可申上如此御坐候、尚

期拜悟候、不（略）一

四月廿五日

二白、古賀源氏より御話申上呉被置候由  
承知仕候、一体は御難題之義に候得共、  
御差繰御加入被下坎之様に承り、重畳忝  
奉拝謝候、扱加入之人々凡左に  
但外に五六人

有田亀之助 諸岡奎之允

長尾市之進 木原義四郎

池田文八郎 楠田知才

中島新八郎 立川千兵衛

川浪吉之允 副島謙助

福田大之助 古賀権作

成富弥兵衛 大隈八太郎

高木勘之允 木島伸一郎

下村安左衛門 古賀源四郎

三白、御社中には兄下古賀氏計に御相談

仕候、外は窮生之様に存し、黄金家ト

大身之向き々々計に而御坐候間、不悪

御海恕奉希候、拜上

石丸様 空閑

玉案下 島 拜上

【石丸安世家書簡文書番号8】(担当多久島澄子)

明後廿三日、例会相催

候間、午後三時より拙宅

ニ御来駕被下度希

望仕候、此段為可得

貴意此之如くニ御坐候

也

十月廿一日 大木喬任

石丸安世殿

【石丸安世家書簡文書番号9】(担当山口久範)

一筆致啓達候、次第二

冷気ニ相移候得共、愈以

御清廻奉賀候、偕

通坂之折ハ、不相変御

面働罷成られ仕候、御交代も

相決、近々には出坂可相成

最早御仕廻方ニも御取掛

可相成、御交代は、牟田口利左衛門ニ而

御坐候、定而其人々より御掛合

被仕候義とは、相心得候得共

卒度得御意置候、横尾ハ

上佐嘉代官へ転シ被申候も

其許新調方ニ而、上米之義

尚御急ぎ可申遣為候、少々

都合も御坐候付、得御意置候

尚福地・副田ニも御談置可

被成候、此段可得御意置 忽々

御坐候、恐惶謹言

九月二日 伊東外記

石丸嘉右衛門様

【石丸安世家書簡文書番号10】（担当大園隆二郎）

御吊詞被下、其上結構之

御品御惠贈御高情

忝奉拝受候、誠ニ

尊椿ニこそ御不幸

之由、御愁傷之程

御同前奉察候、小生よりそ

御無音仕居候處、前文

之段、畳々にも畏入申候、

何事も御面上可申謝、先ハ

奉復、早々頓首

（安政四年）

十二月廿九日 経種

石丸席五郎様 枝吉李助

拜復

【石丸安世家書簡文書番号11】（担当山口佐和子）

頃日小出より書状之末貴所様

アドレスニシテ返書差出置候処

今以為何義も無之ニ付右

書状相達候哉と相案居申候、

同人当地被罷越候頃合

不相分ニ付、彼是差支候義も

有之、日々返書相待居候、

未御地滞留ニ候哉又ハ過パレイス

罷被帰候哉都合即為御知

被下度奉願候、小生ニも成丈此ウエーキ

中ニは御地罷越度候、右ハ可然哉

如何之御都合ニ候哉為御知被下も

成丈小出杯一同ニ候得は都合も

可然と存居候処其義も不

相叶、併御船之儀も

余程手寄り当月中ニは港居

等も差整度苦配罷在候、右小

出之義ハ小生御地罷越候都合

其外ニ関係仕候間、引弘之

有無其外委敷御急答

奉願候、○御地罷越ニ付而は

万端共宜敷御周旋

奉願候、先以右為御尋早々  
如斯御座候、恐惶謹言

西洋

二月十日 佐野寿左衛門

(一八六八年・慶応四年)

石丸席五郎様

馬渡八郎様

尚以本文小出引弘相成居候半ハ  
其日限、扱又未御地逗留ニ候半ハ  
此後何日程滞り可相成哉、御旁  
即為御知被下度分而奉希候

以上

【石丸安世家書簡文書番号12】(担当三ツ松誠)

石丸席五郎様 本島藤太夫

御内々

一簡拜啓、時下弥御万祥  
可被成御研業、奉賀存候、  
然は兼而、御談仕り置候通、英学  
稽古として秀嶋藤・中牟田倉  
兩人被仰付、一両日中より出崎有之筈  
御座候間、万事御引廻し  
不能申陳候、惣而は御新聞  
等之事ハ不依何事御内々  
御申越有御座度奉希候、  
一、御献上之器械類持渡り候趣、  
石川より申来、右ニ付石川迄此節  
御差図越左之通御座候間、  
品立御取調之上、二品有之は、  
御引残之義、程能其筋江  
御示談相成度御座候、  
一、持渡り器械之内ニは当時飽  
ノ浦へ有之候同種之品も  
可有之歟、右様之品々は於  
公辺も御不用ニ可有之候間、不及御弁納、此

御方へ御下渡相成候様、被御  
取計度御座候趣、次テニテ

ハルデス江も内々被仰談候而も可然歎

尚御勘弁を以可然被御取計度、

此段為可得貴意如此御座候、

恐惶謹言

(文久元年)

二月廿日 本嶋藤太夫

石丸席五郎様

〔石丸安世家書簡文書番号13〕(担当三ツ松誠)

一筆致啓達候、然ハ

御手許より御拝借之

三兵タクチイキ原書上下二冊

御用被為在候条

便宜次第成丈急ニ

御仕向可被成、此旨

為可申越如斯御座候、

以上

六月廿二日 千住大之助

横山平兵衛

古川與一

石丸席五郎様

### 三、資料解説

この節では、石丸安世家書簡文書の解説を行う。

(1)、文書番号7と文書番号1は江藤又蔵(新平)<sup>(22)</sup>が石丸虎五郎(安世)<sup>(23)</sup>に宛てた七月二一日の書簡である。

文書番号7の追伸冒頭の「轉殿」、「壽一殿」とは、石丸虎五郎と共に長崎海軍伝習生に選ばれた「秀島轉」<sup>(24)</sup>と「松永壽一郎」<sup>(25)</sup>であろう。目附石橋三右衛門の着到によれば、松永壽一郎・秀島轉・石丸虎五郎の三人の長崎着任は、安政五年(一八五八)五月二五日である。秀島轉だけが安政二年(一八五五)に続き二回目の着任であった。佐賀藩伝習生は翌安政六年の七月には佐賀に帰国する<sup>(27)</sup>ので、これから推察すると、安政五年七月二一日の書簡と考えられる。

他に比定のヒントとして、安政五年五月長崎へ出立の時分に石丸が江藤



に頼んだ「三兵答古知幾」の写本が未だ完成していないことが挙げられる。

「轉殿」、「壽一殿」の呼びかけには、天保四年生れの秀島轉と天保五年生れの松永壽一郎・石丸虎五郎・江藤又蔵の四人の間が親密な関係であることが想像される。江藤が気を許した石丸に、上役のことを指してであろうか「鳥はがあが鳶はパイくく」と揶揄している。鳥とは、鳶とは一体誰のことであったのだろうか。パイくくくと佐賀の三拍子で書いているところも面白い。安政五年とすれば、江藤又蔵二五歳、石丸安世二五歳、秀島轉二六歳、松永壽一郎二五歳である。

(2)、文書番号2は副島種臣から石丸(安世)と長森(敬斐)に宛てた三月二七日の書簡である。

石丸は明治七年七月に大阪の造幣寮造幣権頭となり大阪に赴任する。同一〇年一月、造幣寮は造幣局となり、造幣局長として大阪在勤のまま大蔵省大書記官となる。ここから東京在住が多くなり、同一三年三月には書記局兼務となり益々東京の本省に居る期間が増えている。

長森とは石丸と同じ天保五年(一八三四)生れで、弘道館初等教育課程の蒙養舎時代、互いに『幼学詩韻』を携え行き来した仲の長森傳次郎(敬斐)で間違いのないであろう。国立公文書館の公文録等によれば、長森は明治五年左院中議生となり、同一三年に太政官少書記官、同一五年に参事院議官補、同一八年には会社法条例並破産法編纂委員、同一〇年には法制局参事官、法律取調報告委員として活躍、同二年三月法制局参事官を辞職した。

解説担当の古川英文氏から、副島種臣の手跡から見て、明治十年代後半

に書かれたものではないかとの意見があった。

「扱明日は好文楼にて御侍者之御約束」の条は、年代比定のヒントである。枢密院が作成した副島種臣履歴書には「明治二年四月、宮内省御用掛一等侍講兼務被命。同一七年七月、勲功特授伯爵。同一九年宮中顧問官。同一二年枢密院顧問官」とある。

書簡中の「好文楼」がどこなのか確かめることが出来なかったが、「御侍者」を宮内省御用掛一等侍講となった以降と考えれば、この書簡は明治二年四月以降のものではないだろうか。

石丸安世が明治一七年一月、兄嘉右衛門の死去を機会に帰郷して書簡を整理したとすれば、比定年代は、明治一六年の三月二七日までとなる。

(3)、文書番号3は、武富文之助(定保・圯南)から向井次郎作に宛てた六月六日の書簡である。

武富は、向井に泊番(宿直)を代わってもらい、当月(六月)二日に返勤(代替分の返済勤務)するつもりであったが、病気のために休みの願いを出し、石丸(十作)へ代わりを頼んだが、石丸も都合がつかず、甚だもって申し訳なく深くお詫びし、いまだに出血が止まず身体憔悴甚だしく明日より又休暇を出すので返勤のことは出勤できるまで猶予くださいとの趣旨である。武富が天保九年に江戸から帰国して以降のことであろう。このような折には一回り繰り上げるようにできないか福島(金岡)にも相談したのだが、と、石丸だけでは決めかねる事態を伝えている。文中の石丸とは、文書番号4に出てくる石丸十作で間違いないと考える。福島は、福島金岡のことであろう。福島は江戸遊学から帰国するのが天保一二年(一八四一)で、武富は同九年帰国で共に帰国後は弘道館教諭である。向井は天

保一〇年八月に横辺田代官助役となり同一二年八月には上佐嘉代官助役との記録がある。

石丸十作<sup>44</sup>は安政三年（一八五六）、弘道館都検就任で、向井次郎作は文久元年（一八六一）に弘道館都検に就任している。武富文之助と福島金岡は、安政四年には共に弘道館教諭である。武富は文久元年に名前が挙がっているが、福島の名は無い。右の次第から、安政三年から四年の可能性が高いと思われる。

(4)、文書番号4は、前山清一郎<sup>45</sup>から向井次郎作と石丸十作に宛てた五月一日の書簡である。

前山清一郎が当直当番に当たっているが昨日夕方より風邪で出勤できないので、誰か代わってくださいと向井次郎作と石丸十作に頼んでいる。

前山清一郎は、安政五年に江戸遊学から帰国し弘道館教授補となる。石丸十作は、安政三年の役料書出帳に弘道館の都検とあるので、安政五年頃の書簡ではないかと考えられる。「文久元年、外様、役料帳」<sup>46</sup>には弘道館教諭武富文之助、同差次前山清一郎とある。「文久元年役々料書出帳」には、向井次郎作の役職は学館都検である。

(5)、文書番号5は古賀一平<sup>47</sup>から（石丸）虎五郎へ宛てた九日付の書簡である。冒頭部分に追伸が、本文の行間に四行書かれている。

本文中の坂井とは、義祭同盟参加者の坂井辰之允<sup>48</sup>を候補として挙げられる。大きなヒントとなるのは、中程の「今昼より又々御出船之よし」の一条である。石丸虎五郎は、安政五年五月二五日、長崎に着いてから海軍伝習に励んでいるが、翌六年三月からは蒸気船電流丸に乗組み長崎港周辺で

の实地訓練に励んでいる。目付石橋三右衛門の口達録によれば、安政六年四月九日長崎港を出港した。ところが大嵐のために僚船の飛雲丸（帆船）を牽引して翌一〇日に引き返している。佐賀藩が幕閣に働きかけ導入した蒸気船電流丸は、漸く安政五年の暮にオランダから長崎港に着いた。電流丸での佐賀藩士の訓練は、幕府の訓練生が江戸へ引き上げた後の安政六年三月からカッテンディーケを団長とするオランダ人教師を独り占めにして始まった。それは、同年七月まで続く。以上の事からこの書簡は、安政六年（一八五九）四月九日に書かれたものと判断した。

古賀一平（定雄）は早世のためよく知られていない。一平の孫、山村聰（俳優、二〇〇〇年没）<sup>49</sup>は著書で定雄の資料が有ると言っている。

(6)、文書番号6は、空閑（次郎八）<sup>51</sup>と島（團右衛門）<sup>52</sup>から石丸（虎五郎）に宛てた書簡である。

空閑と島が企画した舫企講<sup>50</sup>（金銭の融通を目的とした民間互助組織）に石丸も誘われて加入に同意したようである。文中に舫企講加入者一八人が書かれている極めて興味深い史料である。窮乏生は入れず、黄金家と大身ばかりを募ったと言っている。

一八名の中で義祭同盟連名帳記載者は、木原義四郎、池田文八郎、楠田知才、副島謙助、大隈八太郎の五人である。島團右衛門は義祭同盟創始の嘉永三年に、空閑次郎八と石丸虎五郎は翌嘉永四年に、連名帳に記載されている。一三人の名前を万延元年から文久元年までの「年役々料書出帳」・「役料帳」に見出したので別表4に書き出した。

島は安政元年江戸遊学、同三年蝦夷地探検、同四年樺太行と佐賀を離れることが多い。文久二年（一八六一）には空閑次郎八が没する。石丸は安

別表4 石丸安世家書簡文書の登場人物解説一覧

凡例

出典については下記の略称を用いて記載した。その他の出典についてはその都度文末に明記した。

1. 生馬寛信・中野正裕「安政年間の佐賀藩士」(佐賀大学文化教育学部研究論文集第14集第1号、2009年)を便宜上略称「AS」とした。
2. 生馬寛信・中野聖剛・中野正裕「幕末佐賀藩の手明鎗名簿及び大組編制」(佐賀大学文化教育学部研究論文集第14集第2号、2010年)を略称「TS」とした。
3. 中野正裕「幕末佐賀藩の軍制について『元治元年佐賀藩拾六組侍着到』」(佐賀県立佐賀城本丸歴史館『研究紀要』第7号、2012年)略称を「GS」とした。
4. 中野正裕「幕末期佐賀藩の役料帳について—史料翻刻『年役々料書出帳』『役料帳』—」(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第6号、2012年)を略称「BY」とした。頁数は佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第6号のものである。

氏名	年齢/年	記事(役職/石高/家族/所属組/住所等)	出典
石丸安世家書簡文書No.7・No.1			
江藤新平(又蔵)	安政6年27歳	御火術方手明鎗目附 父親江藤助右衛門57歳郡目附 切米7石毎歳銀二枚(大組) 鍋島志摩組手明鎗頭中野忠太夫 本行寺小路	「TS」
石丸虎五郎	安政5年25歳	十作弟 安政5年午5月25日着崎 鍋島志摩組	『日本電信の祖石丸安世』351頁
秀島轉	安政3年24歳	父親秀島卯右衛門切米30石55歳 鍋島播磨組 通小路	「AS」
	文久元年	御火術方助役 役料米3石充	「BY」72頁
松永壽一郎	安政3年23歳	父親松永宗右衛門(改名平治)切米50石 多久縫殿組 片田江	「AS」
	文久元年	御火術方助役 役料3石充	「BY」72頁
石丸安世家書簡文書No.2			
副島次郎(種臣)	文久元年	学館指南役 役料米5石充	「BY」71頁
	元治元年	米18石 副島五左衛門棹 鍋島志摩組 教諭差次	「GS」
長森傳次郎	安政3年23歳	○文学独看 父親長森喜右衛門切米50石46歳槍印可 鍋島隼人組 鬼丸	「AS」
	明治	明治5年左院中議生、13年太政官少書記官、15年参事院議官補、18年会社法条例並破産法編纂委員、20年法制局参事官として法律取調報告委員、24年3月辞職	国立公文書館公文録
石丸安世	明治	明治4年4月15日工部省電信係、同8月15日初代電信頭、6年2月東京・長崎間電信架設完成、7年7月27日造幣権頭(大阪)、10年1月11日造幣局長・大蔵大書記官、13年3月15日書記局(東京)兼務、14年11月10日依願免官、15年5月栃木県鍋掛村に石丸農場開設、17年1月帰郷して枝吉神陽顕彰碑建立に奔走、同5月海軍省主船局副長、同9月15日小野浜造船所(神戸)へ出張、18年2月21日小野浜造船所所長、19年1月海軍大匠司、同4月廃官、5月8日非職、小野浜造船所所長被免、20年枝吉神陽顕彰碑完成、22年非職満期、叙正五位、同12月18日東京府へ転籍、23年6月12日元老院議官、叙従四位、同10月20日元老院廃止	『日本電信の祖石丸安世』
石丸安世家書簡文書No.3			
武富文之助	安政3年49歳	米9石一代 鍋島左太夫組→鍋島皐之助組 八幡小路	「AS」
	安政4年	弘道館教諭 役料米7石充(但壺部引)	「BY」60頁
	文久元年	弘道館教諭 役料米7石充	「BY」69頁
向井次郎作	安政3年53歳	切米20石 嫡子小三郎18歳 大木主計組→鍋島千之丞組 袋村	「AS」
	文久元年	学館都検 役料米5石充	「BY」71頁
石丸十作	安政3年40歳	○文学独看 父親石丸六兵衛物成46石69歳 鍋島志摩組→鍋島周防組 大井樋村	「AS」
	安政3年	学館都検 役料米5石充	「BY」56頁
福島文蔵	安政3年56歳	切米20石 鍋島主水組→坂部又右衛門組 本行寺小路	「AS」
	安政4年	弘道館教諭 役料米7石充(但壺部引)	「BY」60頁
石丸安世家書簡文書No.4			
前山清一郎	安政3年31歳	切米25石 ◎文学独看槍目録 父親前山五兵衛長信 深江六左衛門組 古賀	「AS」
	文久元年	弘道館差次 役料米4石6斗6升6合6勺充	「BY」60頁

氏名	年齢/年	記事(役職/石高/家族/所属組/住所等)	出典
石丸安世書簡文書No.5			
古賀一平	安政3年25歳	切米35石 ◎文学、剣 龍泰寺小路 鍋島市佑組	「AS」
坂井辰之允	安政3年24歳	父親坂井佐兵衛切米40石○槍免状43歳 鍋島弥平左衛門組→多久縫殿組	「AS」
石丸安世書簡文書No.6			
有田亀之助	安政3年21歳	物成275石 鍋島左太夫組→鍋島皐之助組 中ノ小路	「AS」
諸岡奎之允	安政3年21歳	物成215石 父親諸岡伴之進47歳 中野神右衛門組→鍋島弥平左衛門組 枳小路	「AS」
	文久元年	川副代官助役 役料米3石充	「BY」73頁
長尾市之進	文久元年	三御丸御番 役料米5石充	「BY」73頁
	元治元年	物成70石 秀嶋清治組仮組頭 原田大右衛門組 市之進悴永尾英太郎新聞社編輯人	「GS」
長尾如吉	安政3年32歳	物70石◎文学独看槍免状 中野神右衛門組→原田大右衛門組 片田江	「AS」
木原義四郎	安政3年29歳	切米35石 ○文学独看 多久縫殿組 木原村	「AS」
	文久元年	学館指南役 役料米5石充	「BY」71頁
池田文八郎	安政3年24歳	◎文学独看劍免状 父親池田半九郎物230石内役30石53歳 鍋島左馬助組 八幡小路	「AS」
	文久元年	学館指南役 役料米5石充	「BY」72頁
楠田知才	安政3年27歳	父親楠田宗巴切米35石内加5石65歳 鍋島市佑組 安住	「AS」
	文久元年	御茶道頭 役料米4石充	「BY」67頁
中島新八郎	安政3年20歳	物成100石 鍋島隼人組 鷹師	「AS」
立川千兵衛	安政3年24歳	父親立川兵藏物成30石56歳 鍋島志摩組 鬼丸	「AS」
	文久元年	御門御式臺番 役料米2石充	「BY」74頁
川浪吉之丞	安政3年28歳	物成110石 ◎文学独看槍免状 深江六左衛門組 八幡小路	「AS」
	文久元年	市武代官助役 役料米3石充	「BY」71頁
副島謙助	安政3年29歳	◎文学独看劍免状 父親副島彦之允切米35石46歳 多久縫殿組 御茶屋番	「AS」
	文久元年	学館指南役 役料米5石充	「BY」71頁
福田大之助	文久元年	御門御式臺番 役料米2石充	「BY」74頁
	元治元年	切米30石 御蔵心遣 深江六左衛門組 明治期職業は陸軍佐官	「GS」
古賀権作	安政3年23歳	物成120石 大木主計組→鍋島千之丞組 田代	「AS」
成富弥兵衛	万延元年	詰番外御小姓 役料米4石充	「BY」63頁
	文久元年	詰番外御小姓 役料米4石充	「BY」66頁
大隈八太郎	安政3年19歳	物成120石 鍋島隼人組 会所小路	「AS」
	文久元年	蘭学寮指南役 役料米4石充	「BY」72頁
高木勘之允	安政3年21歳	父親高木長左衛門物成200石内加米47石68歳 北御堀端 若舂	「AS」
下村安左衛門	安政3年38歳	物成150石 鍋島周防組 鬼丸	「AS」
	文久元年	三御丸御番 役料米5石充	「BY」72頁
古賀源四郎	安政3年38歳	米23石4斗 ◎文学出精劍免状 大木主計組→鍋島千之丞組 西御堀	「AS」
	文久元年	皿山代官助役 役料米3石充	「BY」73頁
島團右衛門	安政3年35歳	切米25石 ◎文学独看劍目録 鍋島市佑組 片田江	「AS」
空閑次郎八	安政3年27歳	◎文学独看劍目録 父親空閑儀兵衛切米20石56歳 鍋島志摩組 大野原	「AS」
石丸安世書簡文書No.8			
大木喬任(民平)	安政3年25歳	物成45石 ○文学独看 鍋島志摩組→鍋島左馬助組 会所小路	「AS」
	文久元年	学館指南役 役料米5石充	「BY」71頁

氏名	年齢／年	記事（役職／石高／家族／所属組／住所等）	出典
石丸安世書簡文書No.9			
伊東次兵衛（外記）	安政3年51歳	切米60石→75石→150石（加米95石役料5石）鍋島周防組 八幡小路	「AS」
	安政4年	米28石充（但壺部引）請役所相談役	「BY」59頁
	文久元年	請役所相談役 役料米28石充	「BY」68頁
牟田口利左衛門	安政3年44歳	米32石4斗 ○槍免状 子徳太郎（元学）14歳 多久伊織→岡部空助組 今宿裏小路	「AS」
	安政4年	郡方附役 役料米8石充（但壺部引）	「BY」59頁
	文久元年	御蔵方附役 役料米6石充	「BY」69頁
石丸嘉右衛門	文久元年	御蔵方附役差次 役料米4石充	「BY」69頁
石丸安世書簡文書No.10			
枝吉空助（名経種、号神陽）	安政3年35歳	○文学独看 父枝吉忠左衛門切米30石（加米5石）大木主計組→鍋島千之丞組 南堀端	「AS」
	万延元年	御什物役御道具役 役料米5石充	「BY」63頁
	文久元年	御什物役御道具役 役料米5石充	「BY」65頁
石丸安世書簡文書No.11			
佐野寿左衛門（常民）	安政3年35歳	養父佐野孺仙切米70石 鍋島隼人組 枳小路	「AS」
	万延元年	精煉方 役料米3石充	「BY」64頁
	文久元年	海軍取調方 役料米5石充	「BY」65頁
小出千之助	安政3年	五人扶持（米9石）一代 鍋島志摩組 大島	「AS」
		兄小出利兵衛切米20石 鍋島志摩組 川副今村	佐賀医学史研究会報106号「小出千之助と馬渡嶺雲」
		兄馬渡嶺雲・邦高（小出文庵・文堂）医師明治16年没	
馬渡八郎	安政3年19歳	馬渡又兵衛物成50石40歳 鍋島志摩組 泰安小路	「AS」
	文久元年	海軍取調方助役 役料米3石充	「BY」74頁
石丸安世書簡文書No.12			
本島藤太夫	安政3年46歳	切米65石内加5石役25石 ○火術奥義 鍋島志摩 水ヶ江	「AS」
	万延元年	御側御目付 役料米10石	「BY」64頁
	文久元年	御側御目付 役料米10石	「BY」65頁
秀島藤之助	安政3年22歳	○蘭学四段 父親秀島権太夫切米20石48歳 鍋島志摩組 愛敬島	「AS」
	文久元年	海軍取調方助役 役料米3石充	「BY」74頁
中牟田倉之助	安政3年21歳	米9石○蘭学四段 鍋島志摩組 古賀村 実父は金丸文雅、中牟田武貞の養子となる	「AS」
	文久元年	海軍取調方助役 役料米3石充	「BY」74頁
石川寛左衛門	安政3年52歳	物成120石 深堀在番 坂部又右衛門組	「AS」
石丸安世書簡文書No.13			
千住大之助	安政3年42歳	切米20石 ◎文学独看槍目録 鍋島市佑組→鍋島弥平左衛門組 鬼丸	「AS」
	万延元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」62頁
	文久元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」65頁
横山平兵衛	安政3年45歳	物成45石 ○槍免状 鍋島弥平左衛門組 十間堀	「AS」
	万延元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」62頁
	文久元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」65頁
古川與一	安政3年44歳	米18石 鍋島市佑組→鍋島播磨組 八幡小路 子源太郎16歳	「AS」
	万延元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」62頁
	文久元年	御小姓頭 役料米7石充	「BY」65頁

政五年五月から長崎で海軍伝習と英学稽古で、殆ど帰国していない。右の次第からこの書簡は、石丸虎五郎が長崎海軍伝習生に選抜され佐賀を離れる安政五年五月二五日以前のものではないかと考える。

また、空閑次郎八と島團右衛門が何の目的で資金集めをしたのか、大変興味深い文書と考える。

(7)、文書番号8は大木喬任<sup>(53)</sup>から石丸安世宛に出された一〇月二一日付の書簡である。これは大木が喬任と書き、石丸の宛名に安世としているところから、明治四年後半から明治一六年までのものと考ええる。

石丸は、明治四年四月一五日、工部省の電信係主任として勤務を始めるが、その時はまだ虎五郎であった。おそらく、同年八月一五日、初代電信頭に任命されるまでに、安世と改称したものと思われる。

石丸安世の佐賀への帰郷が確実に判明するのは、兄、石丸嘉右衛門死去(明治一七年一月二二日)の時である。石丸の佐賀滞在は、相良宗藏<sup>(54)</sup>の書簡から推察して一ヶ月程ではなかったかと思われる。この間に、相良宗藏(神陽の同僚で博覧強記)をたびたび訪問して話を聞き、恩師枝吉神陽の顕彰碑建立の準備を始めたことが、帰京後の石丸安世が相良宗藏に出した書簡三通、明治一七年三月一三日・同年三月二六日・同年七月一日(佐賀県立博物館所藏<sup>(55)</sup>)から分かっている。

安世は兄嘉右衛門の死去で、明治一七年一月から二月に佐賀に帰郷し、相良宗藏を訪問し、枝吉神陽の顕彰碑建立の思いを強くした。この滞在期間に、石丸嘉右衛門家に存在した書簡の整理を安世自身が行った可能性も考えられる。

文中の「例会」であるが、今のところ解明することができない。しかし

ながら、明治四年以降の大木喬任と石丸安世の交際が明らかとなった。

(8)、文書番号9は伊東外記<sup>(56)</sup>から石丸嘉右衛門に宛てた九月二日の書簡である。

ヒントは、伊東が外記と名乗る、文久二年(一八六二)一月二三日と石丸十作が家督相続後の嘉右衛門への改称である。石丸兄弟の父親六兵衛の死亡は、安政四年(一八五七)十一月一四日である。「文久元年、外様、役料帳<sup>(57)</sup>」では、伊東次兵衛は請役所相談役である。石丸嘉右衛門は御蔵方附役差次とあるので、文久元年には十作は改称している。

伊東外記の日記によれば、文久三年一月、借金整理と資金調達のため大坂出張を命じられ、二月八日に出発して同月一八日大阪に到着した。鴻池等銀主に面談を重ね、三月四日、「今日は石丸十作於畑茶屋薄茶振舞有之候事<sup>(58)</sup>」と記す。嘉右衛門と改称しているにもかかわらず、旧称十作と呼ぶ所に、伊東外記の石丸嘉右衛門への親密度が窺える。外記は宗徧流<sup>(59)</sup>の茶を嗜むが、嘉右衛門もその心得があったものと思われる。

書簡文中「御交代も相決、近々には出坂可相成」の条から、石丸嘉右衛門が大坂着任する際のものではないだろうか。牟田口利左衛門と石丸嘉右衛門の交代時期の確証をまだ得ることができていないので、今のところ、「文久二年九月二日ではないか」に留めたい。

(9)、文書番号10は、枝吉奎助(神陽)から石丸虎五郎に宛てた一二月二九日の書簡である。内容は奎助の母親、喜勢が安政四年一月二四日<sup>(60)</sup>に亡くなったため虎五郎が弔意の品を贈りそれに対しての奎助のお礼の書簡である。虎五郎の父六兵衛も同年同月一四日<sup>(61)</sup>に亡くなっているので、奎助は

「御愁傷之程御同前奉察候」と書いていのである。これにより、この書簡は安政四年（一八五七）一二月二九日に書かれたものと考えられる。

(10)、文書番号11は、佐野寿左衛門から石丸虎五郎<sup>(65)</sup>と馬渡八郎<sup>(66)</sup>宛の二月一日付書簡である。

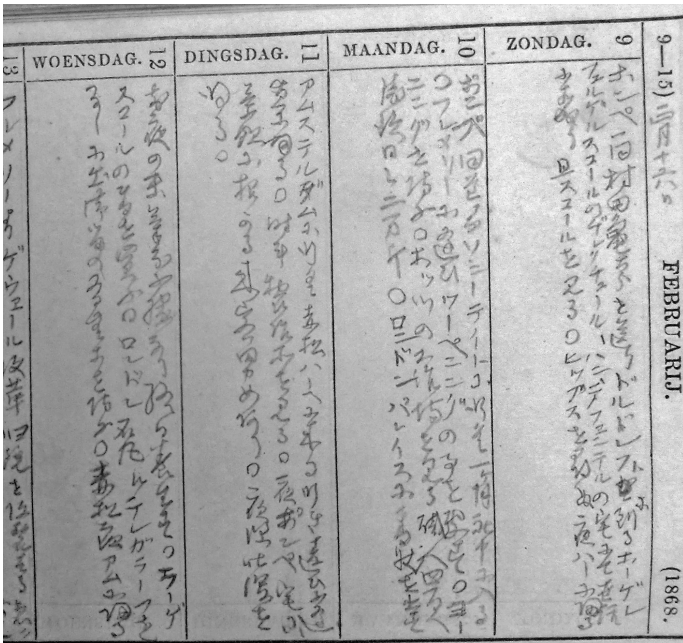
書簡中の小出とは小出千之助<sup>(67)</sup>のことである。石丸虎五郎と馬渡八郎のアドレス（住所）、パレイス（パリ）と続くところから、慶応三年にパリ万国博覧会に参加した佐野寿左衛門・小出千之助・藤山文一・野中元右衛門・深川長右衛門一行の団長佐野寿左衛門が、日進丸購入契約交渉で滞在先のオランダからロンドンの石丸虎五郎と馬渡八郎の二人に宛てた一八六八年二月一〇日の書簡であろうと推量した。

パリ万国博覧会（一八六八年四月一日〜一月三日）に携わった佐賀藩士の動向は、設営にイギリスに密航留学中の石丸と馬渡が駆け付け、開会式後の五月に佐野一行が到着した。閉会式後、売れ残り（焼物以外）の一〇〇箱の茶や蠟は、三〇箱をオランダで佐野と藤山が、四〇箱を石丸と馬渡がロンドンで、三〇箱を小出と深川がパリで売り捌いたのであった。

佐野常民記念館には、佐野がオランダで購入し記録した「一八六八年」の黒革の手帳がある。西洋歴二月一〇日（和歴、正月一七日）欄を見てみると、「ボンペ同道ニ而ソシーテイトに行く一ヶ月社中に入る……………○ロンドンパレイスに書状を出す」とある。佐野は小出が教えた石丸と馬渡のロンドンの住所に便りを出すのが、返事が無いので困惑している。小出はパレイス（パリ）に最早帰ったのか、未だ滞在中かと尋ねている。今週中には自分もロンドンへ行きたいという。これにより、「ロンドンパレイスに書状を出す」とは、ロンドンの石丸虎五郎・馬渡八郎とパリの小出千之

助宛に書状を出したということであろう（写真D）。

翌々日の二月一二日には「……………ロンドン石丸江テレグラフをなし小出滞留の有無等を訪ふ<sup>(70)</sup>」とあり、佐野は電報で小出千之助がまだロンドンに滞在しているか尋ねている。余程小出に急用があったのであろう。この後、四月一日に至り、「……………午前十二時ロンドンのビシュブケートスタションに着、石丸出迎へ、一同にイスリングストーンに行き……………ストランド十番に旅舎す<sup>(71)</sup>」。佐野は石丸の案内でロンドンの議事堂・製鉄所・ケンブリッジとオックスフォード両大学・博物館・エンヒールド小銃製作場・ウールウィチ大砲製造局等々の見学を経て、四月一九日、マルセーユから帰国の船に乗り、西洋歴六月九日（和暦閏四月一九日）長崎に着いた。



写真D 佐野寿左衛門の手帳から1868年2月10日、2月12日

佐野常民の「慶応四辰九月十日開局、諸草稿、軍務方」(写真E)には、

九月十日開局 晴

御頭人 安藝殿

御相談人 外記殿

附役 佐野寿左衛門

本島喜八郎

島内平之助

十一日晴：略：(写真F)

十二日雨

今度軍務御取調ニ付、洋書調子御用有之条、左之人々役内懸り

合被仰付方ニ者有御座間敷哉

石黒貫二

十三日御達相成嘉右衛門弟

石丸虎五郎

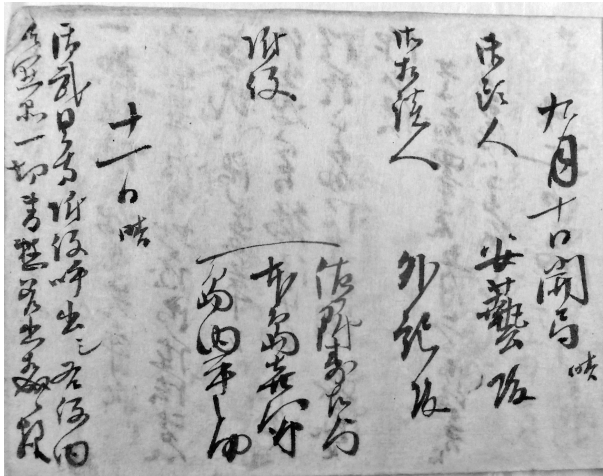
一寿左衛門儀、榮寿左衛門江改名願之通昨十一日被仰付候段、

鈞合相成候 (写真G)

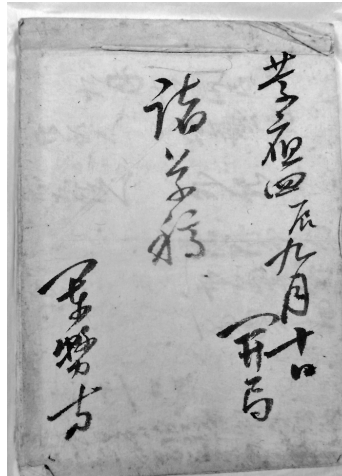
とある。佐野寿左衛門は明治元年(一八六八)九月一日、榮寿左衛門と改名したのであった。右の次第からこの文書番号11書簡は、佐野が寿左衛門と書いているところからも、一八六八年(慶応四)二月一〇日に佐野がオランダで書いた書簡と考えるとよいだろう。

密航留学の罪を憚って上海に待機し、遅れて帰国した石丸虎五郎は、九

月一三日に軍務局洋書調子御用に取りたてられている。これにより、拙書『日本電信の祖石丸安世』では、石丸虎五郎の佐賀藩復帰を明治元年九月二二日の「船方差次」としてきたが、それより九日遡り、明治元年九月一三日に石丸虎五郎は佐賀藩に復帰していたことが解明できた。

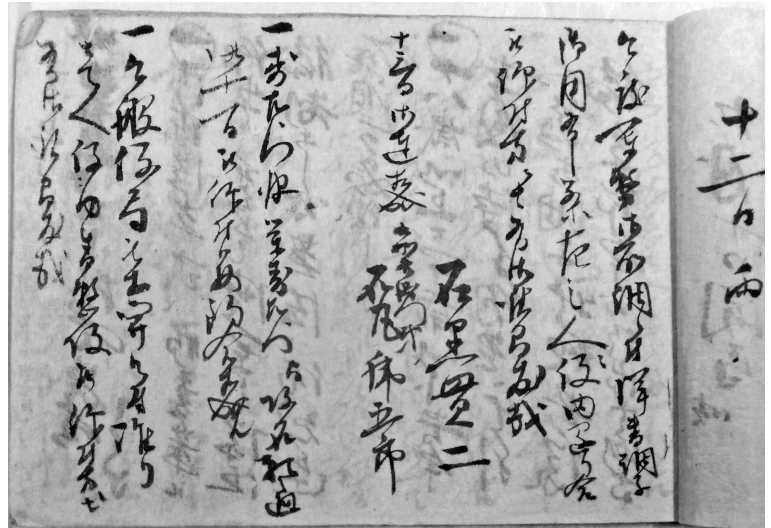


写真F



写真E





写真G

(11)、文書番号12は、本島藤太夫から石丸虎五郎に宛てた二月二〇日の書簡である。

本島藤太夫は文久元年、藩主直正の御側御目附である。安政六年から継続して長崎で伝習中であつた石丸虎五郎に対して、藩主の意向を細かく伝えていた書簡である。

本島藤太夫は、文化七年(一八一〇)一二月、佐賀藩土坂井弥兵衛の三男として佐賀城下に生れ、文政一年(一八二八)に本島家の養子となり、文政一三年には御側に出仕、藩命により伊豆葦山代官江川太郎左衛門に大砲に関する知識を習い、天保一五年(一八四四)に家督相続して御火術方

掛合となり、嘉永三年(一八五〇)三月、再度長崎砲台増築のため江川の元に派遣され江戸湾実情調査と佐久間象山に砲術・築城法等を学び、帰国後の同年六月、四一歳の時大銃製造方の主任となる。同五年、鉄製大砲の鑄造に成功し、新設された長崎の台場に据付けられた。その後公儀御石火鑄立付役、蒸気船製造役局掛合等を歴任した。

石丸虎五郎、中牟田倉之助、秀島藤之助の三人に文久元年二月一日、英語稽古の藩命が下った。この時の事情は『中牟田倉之助傳』に詳しいので以下これに依つて書く。中牟田は二月一〇日、「御用之儀候條、明朝飯後、御城御出可被成候」との御用状を受け、一日に登城し、英語稽古の爲秀島藤之助と共に、出崎を仰せ付けられた。中牟田と秀島は相談して、ハンデルペイル英蘭対訳書一部、ホーイベルフ又はボンホフ英蘭対訳辞書二部、和蘭辞彙一部の購入願いを提出し、鮑ノ浦<sup>76</sup>のオランダ人教師や長崎の通詞と教師、往年来親交深い薩摩藩士に藩費で贈物用意してもらうことに成功した<sup>77</sup>。支度金二両を得て、本庄津から二月二三日出発して長崎に向かった。三二人が暇乞いに訪れ、その内の一七人が本庄津まで見送つた<sup>78</sup>。「中牟田」の親友石丸虎五郎・馬渡八郎の二人、閑叟公の命を奉じ既に長崎に在りて英学を修む、中牟田は石丸の推薦に基きて派遣せらるゝに至りしなり<sup>79</sup>とあり、虎五郎が長崎で秀島と中牟田を迎えたのは、二月二四日のことであつた。当時虎五郎は長崎に於いて、鮑ノ浦蘭人に就いて機械学と英学とを研究中であつた<sup>80</sup>。

本島の書簡は二月二〇日付で、次の三点を伝えている。

① 秀島藤之助と中牟田倉之助が一両日中に長崎に出発すること。「御新聞等之事」とは石丸が命令を受けていた英字新聞翻訳のこと。

② 「御献上之器械類持渡り候趣」とは、佐賀藩がオランダから輸入して

幕府の鮑ノ浦製鉄所に入れた造船器械のことで、「石川」とは、佐賀藩長崎聞役石川寛左衛門のことである。

③オランダから輸入した器械類の内、既に鮑ノ浦に同種の物が有る場合は、佐賀藩に下げ渡しになるよう取り計るよう、ハルデス<sup>(83)</sup>へも働きかけるように。と、安政四年、器械と共に鮑ノ浦に着任したオランダ人技術者ハルデスのことにも言及している。

中牟田倉之助も書いているように、石丸は安政五年以来長崎において引き続き伝習を続け、この時既に約三年間、ハルデスに就いて学んでいたのである。

右の次第から文書番号12は、文久元年（一八六一）二月二〇日の書簡と考える。

(12) 文書番号13は、千住大之助<sup>(84)</sup>・横山平兵衛<sup>(85)</sup>・古川與一<sup>(86)</sup>が石丸虎五郎へ宛てた六月二二日の書簡である。

内容は、藩主直正の御手許より御拝借中の「三兵タクチキ原書上下二冊」を、御用の為なるだけ急いで返却して欲しいというもので、この原書とは、プロシヤ人フランクの原書をオランダ人ミユルケンがオランダ語に訳した本のことであろう。

『三兵答古知幾』<sup>(87)</sup>は、『鍋島直正公傳』四巻の一五八頁に出ている。安政元年、蘭学寮が火術方に移る頃には『三兵答古知幾』は佐賀藩に導入されているようだ。

千住、横山、古川が御小姓頭として三人一緒に役料帳に名前を確認できるのは、万延元年（一八六〇）と文久元年（一八六一）である。石丸虎五郎は、安政五年（一八五八）、六年（一八五九）の海軍伝習時代から継続し

て、万延、文久、元治、慶応元年（一八六五）一〇月まで長崎で英学の伝習と翻訳・通訳を務めている。

この文書番号13は、石丸が直正公手許から「三兵タクチキ原書上下二冊」を借用できる実力者となる文久元年（一八六一）のものではないかと考える。

## おわりに

二〇一三年に刊行した拙書『日本電信の祖石丸安世』には、この一二通の書簡の人物群と石丸虎五郎（安世）の関係を明確に著述することはできなかった。本稿では枝吉空助（神陽）、島團右衛門（義勇）、空閑次郎八、古賀一平（定雄）、武富文之助（圯南）、前山清一郎、向井次郎作、伊東外記、佐野寿左衛門、本島藤太夫、千住大之助、横山平兵衛、古川與一、副島種臣、大木喬任と石丸虎五郎（安世）の関係が見えてきた分を書き示した。

文書番号7、1の江藤又蔵（新平）書簡では、江藤が蘭学に執心していたことが、「三兵答古知幾」筆写のところで明確となった。新平、虎五郎、秀島轉、松本壽一郎と、ほぼ同年の四人が親密な関係であることが窺える。弘道館や蘭学寮で共に学んだ者同志の隠語を交えた貴重な私信と言えるのではないだろうか。

文書番号3、4では安政期の弘道館宿直の様子が分かる教諭と都検のやりとりである。宿直の借りを返すことを「返勤」と呼んでいたことなど弘道館の具体的な実態が分かる。このような弘道館組織・人物群に、虎五郎をはじめとして後進は学び、影響を受けていたのである。

文書番号9では、藩主直正の懐刀と言われた伊東外記が石丸嘉右衛門に信頼を置いていたことがよく分かる書簡である。このように評価高かった嘉右衛門（十作）を虎五郎は兄に持っていたのである。

文書番号5、6からは、石丸虎五郎の佐賀藩内での幅広い交友関係が浮き彫りになった。古賀一平、空閑次郎八、島團右衛門と虎五郎との関係は今までよくわからなかったのだが、一平も次郎八も團右衛門も虎五郎に信頼を置いていることが行間から窺えるのである。

文書番号10では、神陽から虎五郎へ投げかける温かい言葉により、虎五郎への神陽の期待と虎五郎の神陽に対する尊敬の念が偲ばれる。

文書番号2、8では、明治政府の高官となった副島種臣と大木喬任と石丸安世の関係が垣間見える。種臣と安世、喬任と安世は、東京に出てからも交流を続け、近代日本の建設に知恵を出し合っていたことが想像できる。

文書番号12、13では、藩主直正が期待と信頼を寄せていた石丸虎五郎像が見えて来る。文書番号12は、直正御側御目付の本島藤太夫が直正の意向を内密に虎五郎に伝えている。文書番号13では、直正手許の三兵タクチイキ原書上下二冊が虎五郎に貸し出されていることが分かる。

文書番号11は、パリ万国博覧会終了後、帰国直前の慶応四年二月、オランダの佐野寿左衛門がロンドンの石丸虎五郎と馬渡八郎へ出した書簡である。この書簡こそは虎五郎がロンドンから持ち帰っていたからこそ我々も読むことができるのである。

「十作弟」、「嘉右衛門弟」と石丸虎五郎に肩書が付いた文書ばかりを目にしていた筆者にとって、文書番号11、12、13の、佐野寿左衛門・本島藤太夫・千住大之助・横山平兵衛・古川與一が、「石丸虎五郎様」と書いている

ことに新鮮な驚きを感じた。しかも、佐野寿左衛門と本島藤太夫は、書簡末尾に「恐惶謹言」と最上の敬いをもって記しているのである。文久元年二月、長崎での英語稽古の藩命が下る頃、石丸虎五郎は、佐賀藩における英学第一人者であり、傑出した海軍伝習者であったことを証するものと言えよう。

書簡は、石丸虎五郎（安世）宛てが九通、石丸嘉右衛門関係が三通である。嘉右衛門関係は安政から文久年間のもので、安世関係は安政四年から明治一六年までのものと考えられる。現段階のまとめとして別表5を作成した。

一節で、旧百崎家の石丸安世家書簡文書は、百崎知親が入手したのだからかと推理したが、「現在の屋敷は、百崎欽一（一八八〇～一九五五）が、或る未亡人より買い取って大正三年（一九一四）に百崎医院を開業」した際、買い取った家に付随していた可能性も考えられる。

また、この書簡を屏風に仕立てた人物を推察すると、

- ① 明治一七年一月から二月の間に石丸安世本人が仕立てた。
- ② 嘉右衛門が健在のときに仕立てた。
- ③ 嘉右衛門と安世が二人揃って仕立てた。
- ④ 第三者が仕立てた。

右の四通りが推察される。書簡の貼り付け順序については、当事者の石丸嘉右衛門か石丸安世でなければできなかったようにも思え、全く無作為に行われたようにも見える。

旧百崎家の石丸安世家書簡文書については今後とも究明に努めたい。

別表5 石丸安世家書簡文書作成年代一覧 順序は現段階で検討した結果である 2019年11月 多久島澄子作成

文書番号	作成年	西暦	月日	西暦月日	作成者	作成場所	宛名	受取人住所
No.10	安政4年	1857	12月29日		枝吉空助	佐賀	石丸虎五郎	佐賀
No.4	安政5年	1858	5月11日		前山清一郎	佐賀	向井次郎作・石丸十作	佐賀
No.7・1	安政5年	1858	7月21日		江藤又蔵		石丸虎五郎	長崎
No.5	安政6年	1859	4月9日		古賀一平	長崎	石丸虎五郎	長崎
No.12	文久元年	1861	2月20日		本島藤太夫	佐賀	石丸虎五郎	長崎
No.9	文久2年	1862	9月2日		伊東外記		石丸嘉右衛門	佐賀
No.11	慶応4年	1868	1月17日	2月10日	佐野寿左衛門	オランダ	石丸虎五郎・馬渡八郎	ロンドン
文書番号	作成年	西暦	月日	西暦月日	作成者	作成場所	宛名	受取人住所
No.3	安政3～4年	1856～1857	6月6日		武富文之助	佐賀	向井次郎作	佐賀
No.6	安政2～4年	1855～1857	4月25日		空閑次郎八・島團右衛門	佐賀	石丸虎五郎	佐賀
No.13	万延元～文久元年	1860～1861	6月22日		千住大之助・横山平兵衛・古川與一	佐賀	石丸虎五郎	長崎
No.8	明治5～16年	1872～1883	10月21日		大木喬任	東京	石丸安世	東京
No.2	明治12～16年	1879～1883	3月27日		副島種臣	東京	石丸安世・長森敬斐	東京

謝辞

本稿作成並びに発表にあたりましては、ご所蔵者の服部康喜様服部八重様ご夫妻と石井家ご子孫影山信雄様に一方ならぬご協力をいただきました。感謝申し上げます。服部八重様には、千葉県市川市影山信雄様に何度もお手紙・電話をされて石井家の家系譜写、石井家・百崎家過去帳等を入力してくださいました。

佐野常民記念館館長諸田謙次郎様、同館近藤晋一郎様、鍋島報效会富田絃次様、石丸安世家書簡文書会会員の皆様、研究紀要編集事務の皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

史料

佐賀市佐野常民記念館所蔵「J A A R B O E K J E (オランダ製革製手帳) 一八六八年(慶応四・明治元)」（佐野常民がオランダで求め記録した手帳）  
佐賀市佐野常民記念館所蔵「慶応四辰九月十日開局、諸草稿、軍務方」（佐野常民の軍務方に関する覚書）

影山信雄（千葉県市川市高石神、泰福寺）所蔵「石井家系譜写」  
影山信雄所蔵「石井家・百崎家の過去帳」（影山堯雄作成）

参考文献

秀島成忠『佐賀藩海軍史』知新會、一九一七年  
中村孝也『中牟田倉之助傳』中牟田武信、一九一九年  
中野禮四郎編『鍋島直正公傳』侯爵鍋島家編纂所、一九二一年  
造幣局『造幣局七十年史』一九四二年  
吉見貞章『佐賀県医事史』郷土新報社、一九五七年

中原勇夫編『今泉嶸守歌文集』一九七一年

山村聰『釣りひとり』二見書房、一九七四年

村山和彦『佐賀藩幕末関係文書調査報告書』佐賀県立図書館、一九八二年

佐賀の文学編集委員会『佐賀の文学』新郷土刊行会、一九八七年

岸川雅俊「西海日記―勇魚取り」(九州大学医学部外科第一講座『同門会誌』第一八巻、一九八三年)

岸川雅俊「益柿」(九州大学医学部外科第一講座『同門会誌』第一五巻、一九八五年度二四頁別刷)

佐賀近代史研究会『佐賀新聞に見る近代史年表明治編上』佐賀新聞社、一九八七年

小宮博康『佐賀県歴史人名事典』洋学堂書店、一九九三年

アンドリュウ・コビング『幕末佐賀藩の対外関係の研究』(財)鍋島報効会、一九九四年

大園隆二郎『大隈重信』西日本新聞社、二〇〇五年

犬塚孝明「佐賀藩イギリス留学生」(『世界を見た幕末維新の英雄たち』新人物往来社、二〇〇七年)

多久島澄子「英人莫理斯と経緯舎」(二二)伊万里市郷土研究会『烏ん枕』七八号、二〇〇七年)

佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第五編第一巻、二〇〇八年

生馬寛信・中野正裕「安政年間の佐賀藩士」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第一四集第一号、二〇〇九年)

生馬寛信・串問聖剛・中野正裕「幕末佐賀藩の手明鑑名簿及び大組編制」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第一四集第二号、二〇一〇年)

青木歳幸・野口朋隆『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料』後編

(佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一〇年)

榎本洋介『島義勇』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一一年

佐賀近代史研究会『佐賀新聞に見る近代史年表明治編下』佐賀新聞社、二〇一一年

中野正裕「幕末佐賀藩の軍制について―元治元年佐賀藩拾六組侍着到―」(佐賀県立佐賀城本丸歴史館『研究紀要』第七号、二〇一二年)

中野正裕「幕末佐賀藩の役料帳について―史料翻刻『年役々料書出帳』

『役料帳』―(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号、二〇一二年)

重松優『大木喬任』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一二年

星原大輔『江藤新平』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一二年

多久島澄子『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年

森田朋子・齋藤洋子『副島種臣』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一四年

大園隆二郎『枝吉神陽』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一五年

伊藤昭弘「古文書に見る鍋島直正の藩政改革」佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一五年

串問聖剛「佐賀藩「御鑄立方」の七賢人―経歴と事績を中心に―」(『幕末佐賀藩の科学技術』上、岩田書院、二〇一六年)

多久島澄子「佐賀藩御鑄立方田中虎六郎の事績」(『幕末佐賀藩の科学技術』上、岩田書院、二〇一六年)

多久島澄子「佐賀藩の英学の始まりと進展」(『幕末佐賀藩の科学技術』下、岩田書院、二〇一六年)

多久島澄子「初代電信頭石丸安世」(『近代日本製鉄・電信の源流―幕末明治初期の科学技術』岩田書院、二〇一七年)

多久島澄子「小出千之助と馬渡嶺雲」(『佐賀医学史研究会報』一〇六号、二〇一七年)

佐賀医学史研究会『佐賀医人伝』佐賀新聞社、二〇一八年

伊藤昭弘『古文書に見る鍋島直正の藩政改革』(二)佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一八年

山口佐和子「三重津海軍所跡関連史料編(補遺編) 佐野常民軍務局に関する覚書」(佐賀市教育委員会『佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第10集幕末佐賀藩三重津海軍所跡V-21区の調査』、二〇一八年)

佐賀城本丸歴史館『佐賀県人名辞典』二〇一九年

多久島澄子『香の霞集』(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第一四号、二〇一九年)

国立公文書館 <https://www.digitalarchives.go.jp>

国立公文書館アジア歴史資料センター <https://www.jacar.go.jp/>

【註】

- (1) 筆者は、石丸虎五郎(安世)の生涯を『日本電信の祖石丸安世』と題し二〇一三年に刊行した。石丸虎五郎は天保五年(一八三四)六月二日、佐賀藩土石丸六兵衛の四男として生れた。石丸家は龍造寺豊前守胤家から数えて四代目が石丸備後守で、石丸備後を初代として石丸六兵衛安致は一〇代目、兄嘉右衛門(十作)安積が一一代目である。兄の十作は藩校弘道館で優秀な成績を修め、茶を嗜む。伯母の浦は八代藩主治茂の娘徽姫(中院通繁に嫁す)に天保二年まで奉仕して京都より帰国、病身の為嫁ぐ事なく文久元年没した。佐賀藩歌壇に石丸浦子の名で参加し、『白縫集』、『西肥女房百歌撰』に選歌されている(多久島澄子「初代電信頭石丸安世」『近代日本製鉄・電信の源流』二〇一七年)二七九頁。
- (2) 国は登録有形文化財として名称を「旧百崎家住宅主屋」と表記しているため、引用部分はこれを用い、この稿の本文では百崎家で統一した。

(3) 妙光山常照院(佐賀市本庄町鹿子)は、佐賀藩藩祖直茂が正室陽泰院を見初めた地である石井氏の飯盛城跡で、石井常延(陽泰院実父)・石井如自(佐賀俳壇先駆者二代藩主光茂の御歌書役)の墓所がある。

(4) 南里早智子氏は佐賀市柳町在住の佐賀医学史研究会会員で医学史をはじめ、故人の旧蹟に詳しい。筆者は当時、佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要第一四号(二〇一九年九月三日発行)の原稿「香の霞集」を作成中で、その主人公竹仙居民路の墓が「飯盛の里なる常照精舎」にあるといふので、この日南里氏に常照院案内を依頼していた。

(5) 石井長庵とは、弘化二年(一八四五)巳年総着到下二、三九丁(佐賀県立図書館復三三一/六二)に石井長庵・米九石五人扶持・勘解由組・内治・川久保在住とある。生馬寛信・中野正裕「安政年間の佐賀藩士」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年)には石井長庵・米九石・三一歳・白石原在住とある。『小城日記』には、安政六年五月廿八日、佐賀医師福智院へ出席の事、一、代官所々左之通達出相成候事、手覚、佐嘉医師石井長庵、今廿八日福智院出席有之候事(青木歳幸・野口朋隆『小城日記』にみる近世医学・洋学史料)後編、二〇一〇年)一八一・一八二頁。

(6) 南里早智子氏が目にした書簡は大木喬任が石丸安世に宛てたもので、文書番号8。多久島澄子が目にしたのが江藤又蔵(後の新平)が石丸虎五郎に宛てた書簡で文書番号1である。江藤が又蔵と署名した書簡は非常に少ないことを後日聴いた。

(8) 岸川雅俊は、一九八〇年度第一五巻の『九州大学医学部外科学第一講座同門会誌』にも「盆柿」(二四ページ)と題した作品を発表している。これも神奈垣魯文の『佐賀電信録』(明治七年)等を駆使しているが、蓮池藩下級武士小松次郎の目を通して明治七年の佐賀の乱を描いたものである。恐らく小松家に底本となる日記等があったものと思われる。

(9) 百崎知親は「勇魚取り」の本歌を思い出し、「とこしへに君も遇へやもいさな取り海の浜藻の寄るときどきは」と記している(岸川雅俊「西海日記―勇魚取り」九州大学医学部外科学第一講座「同門会誌」第一八巻、一九八三年)三〇頁。

(10) 松田正久(弘化二年・一八四五〜大正三年・一九一四)とは小城郡牛津生れ、実父は横尾唯七、明治二年大学本校入学、同五年陸軍省よりフランス留学。同九年一二月長崎県議会議長となる。同二〇年検事。同二一年鹿兒島高等中学造士館教

頭（佐賀城本丸歴史館『佐賀県人名辞典』二〇一九年）。

- (11) 乱とは明治七年（一八七四）の佐賀の乱、江藤新平は不平士族たちの征韓党の領袖に推され、江藤は徐族・斬首・梟首の刑となる（佐賀城本丸歴史館『佐賀県人名辞典』）。

- (12) 五島捕鯨会社は、明治一七年五〇万円で払下げられた岩崎の造船所（同二〇年完了の現三菱造船所）、同二〇年一月始まった百万円の佐世保鎮守府建設と並び、長崎県三大事業と称された（『西海日記―勇魚取り』二九頁）。五島捕鯨会社の所在地は上五島中通島有川、明治一七年設立、資本金五万円、社員（株主兼部長）二〇名、手代（課長）二五名、部屋使（従業員）一二名、以上が月給制。他に羽差、労務者、水夫多数。明治一七年度欠損八千円、同一八年度利益四千円、同一九年度利益八千円（『西海日記―勇魚取り』九州大学医学部外科学第一講座『同門会誌』第一八巻、一九八三年）二二頁。

- (13) 石井長益とは石井長庵藤原胤章（鶴吉郎）のことで、石井文伯藤原忠謀（寛一郎・長順）の第二子で文政九年生れ天保七年家督相続、嘉永六年同藩士湯原次郎左衛門の女を娶る、国主直大公の侍医兼医学学校好生館で教える、性闊達にして同藩士前山清一郎と兄弟の好をおさめ外国交通の説を唱え、元治元年四月二八日卒す三九歳、長男環一郎（嘉永七年一月一日生れ）、二男次郎助（安政二年一〇月二六日生れ）、三男小太郎（安政五年二月二六日生れ）、四男袈裟四郎（文久二年八月二日生れ）、室湯原次郎左衛門の女は四男を産み明治一一年六月四日卒四七歳（『石井家系譜写』。吉見貞章『佐賀県医事史』（郷土新報社、一九五七年）四一頁に、医学校正則生徒（明治）七年ヲ期シテ成業ニ至ル者トス）一三人中に、石井長益の名がある。文政九年生れの長益は明治七年（一八七四）には四八歳なので、この長益は、長男重義のことと思われる。佐賀近代史研究会『佐賀近代史年表明治編上』（佐賀新聞社、一九八七年）一六〇頁に、明治三年（一八九〇）一月一八日「医学青年会が発足、佐賀市与賀町の光照寺で発会式、会員四〇名出席、客員石井長益の血液成分講義を聞く」とある。この石井長益は石井重義のことである。石井家系譜写によれば、石井重義は明治二七年二月一三日死去、享年四二歳、法号好生軒重義日勉居士、常照院に葬る。

- (14) 百崎次郎助は石井長益（長庵）の二男として安政二年（一八五五）一〇月二六日に生れ明治四一年（一九〇八）三月二日に没した（百崎家文書・石井家系譜写）。『佐賀県医事史』（郷土新報社、一九五七年）四二頁、医学校初級八〇人中に石井

次郎助の名前がある。次郎助は明治七年（一八七四）には一九歳である。

- (15) 百崎欽一（明治一三年・一八八〇～昭和三〇年・一九五五）、俳号を刀郎、佐賀中から長崎医専に入学。病気の為馬渡島で静養中の明治三五、六年に内藤鳴雪選の『文庫』や虚子・碧梧桐選の『新声』に投句。医専卒業後は好生館に勤め、その後佐賀市水ヶ江横小路（現水ヶ江三丁目）で医院を開業。昭和一一年「白雨会」を結成し句作再開、やがて「白雨会」が「佐賀ホトトギス会」となる。機関誌『楠』も発行した。句集に『楠の落葉』（佐賀の文学）新郷土刊行会、一九八七年）。

- (16) 「安政年間の佐賀藩士」（佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号）二〇〇九年）に、百崎姓は「百崎理左衛門六六歳・米九石・一代・田代在住・坂部又右衛門組」。生馬寛信・串間聖剛・中野正裕「幕末佐賀藩の手明鐘名簿及び大組編制」（佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第二号）二〇一〇年）には百崎理左衛門、一代、米九石但五人扶持無落米皆白、又右衛門組。

- (17) 副島信太郎とはオランダ生れの米国人フルベッキを教師に、大隈たちの提唱でできた長崎の佐賀藩立致遠館の舎監に就任以来当地に留まって教育に従事した。明治一一年現在、二小学校の校長を務める（『西海日記―勇魚取り』三四頁）。

- (18) 百貫とは塩田川の河口港、現鹿島市の最北部（下中邦彦『佐賀県の地名』平凡社、一九八〇年）。

- (19) 百崎親は娘婿次郎助の行末を「医界の方は厳しく、今年（明治二年）から大阪・京都・愛知を除き、府県立医学学校廃止。次郎助も三〇才にもなって今更策を負うこともできず、在来免許の医師ながら、「切腹を仕損じた者の腹を包み、陰囊の腫瘍を切断し、情夫の挿入せる木片を婦人の陰部より取り出す」と旧藩時代に三奇術と謳われた納富医師の末葉で、人柄も普通だから生業だけは立てるであろう」と案じている（『西海日記―勇魚取り』九州大学医学部外科学第一講座『同門会誌』第一八巻、一九八三年）三五頁。納富医師とは納富春人（一七九八～一八五四）華岡流外科医のことであろう（佐賀医学史研究会『佐賀医人伝』二〇一八年）。

- (20) 石井家系譜写は、昭和五六年六月、影山堯雄が石井重男（堯雄の兄石井重義の子重行の子で当時シエル石油札幌支社勤務）から求めた。これにより百崎次郎助の父親が石井家十二代であることが分かる。龍造寺隱岐守藤原家貞から始まり二代龍造寺佐馬頭藤原胤門→三代龍造寺伊賀守藤原家直→四代龍造寺右衛門尉藤原家純→五代石井兵部大夫藤原光則→六代石井孫左衛門藤原胤信→七代石井四郎右衛

- 門藤原胤英↓八代石井藤原自伯↓九代石井長連藤原胤倫↓十代石井自伯藤原忠啓  
↓十一代石井文伯藤原忠謀↓十二代石井長庵藤原胤章十三代石井藤原重義。
- (21) 佐賀近代史研究会『佐賀近代史年表明治編下』(佐賀新聞社、二〇一一年)三三八頁に、明治四四年(一九一一)三月、百崎欽一が医籍に登録されたとある。
- (22) 江藤新平は、天保五年(一八三四)二月九日、父助右衛門胤光、母浅子の長男として佐賀郡八戸村に生まれた。幼名は恒太郎・又藏、諱は胤雄、号は南白・白南。嘉永二年(一八四九)弘道館内生寮に寄宿、嘉永五年(一八五二)義祭同盟に参加、安政元年(一八五四)蘭学寮入校(星原大輔『江藤新平』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一二年)。安政六年(一八五九)には新平二七歳、御火術方手明鑓目附で、父助右衛門(五七歳・切米七石毎歳銀二枚、中野忠太夫手明鑓組に属し大組は志摩組)は、郡目付で本行寺小路に在住(幕末佐賀藩の手明鑓名簿及び大組編制)。
- (23) 石丸安世は、幼名虎五郎、天保五年六月二日、父佐賀藩士石丸六兵衛安致、母多賀の四男として大井樋村に生れた。弘道館蒙養舎、内生寮、と進み嘉永四年(一八五二)義祭同盟に参加、安政元年蘭学寮に入る。安政五年長崎海軍伝習生に選ばれ同六年電流丸に乗り込み伝習、その傍ら英語を学ぶ。安政年間、石丸家は物成四六石、大組は志摩組(周防組)に属す。明治四年(一八七二)工部省出仕後、安世と称し、櫻水と号す(『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年)。
- (24) 秀島轉とは、「安政二卯七月出崎同五年廿五再出崎、切米三拾石、部屋住、秀島轉、午二十六歳」(『海軍伝習二付話中着到』『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年三五〇頁)。これにより秀島轉は、天保四年生れで安政二年と同五年に長崎海軍伝習生に選抜され、志摩組(倉町家鍋島志摩)に属していることが分かる。
- (25) 松永壽一郎は「安政五年五月廿五日着崎、騎馬伝習、切米五拾石、部屋住、縫組(多久縫殿)、午二十五歳」(『海軍伝習二付話中着到』『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年三五〇頁)。壽一郎は、天保五年生れで、安政五年に長崎海軍伝習生に騎馬で選抜された。
- (26) 有明町百貫の石橋家文書「安政五従正月、海軍伝習二付話中着到、御目附方」で、『日本電信の祖石丸安世』(慧文社、二〇一三年)に翻刻掲載している。
- (27) 中村孝也『中牟田倉之助傳』一四八〜一五〇頁。
- (28) 『三兵答古知幾』とは、幕末の洋学者高野長英訳述の兵学書二七卷、嘉永三年(一八五〇)成立。プロシヤ人フランクの原書をオランダ人ミュルケンが訳した(『ブリタニカ国際大百科事典』)。
- (29) 佐賀市民は、「雨がザーザーで降った」、「風がビュービューで吹いてきた」などと、同じ言葉を三回繰り返して事象を表現する。これを佐賀の三拍子という。現在でも使う。
- (30) 副島種臣は、文政二年(一八二八)九月九日生れで明治三八年(一九〇五年)一月三十一日没、享年七八。父は枝吉南濠、兄は神陽。安政六年(一八五九)三月、副島家の養子となり同時に弘道館教諭。文久元年(一八六一)江戸へ派遣され翌二年帰国、同八月神陽死去。慶応三年(一八六七)二月二六日藩学稽古舎長に任命される(森田朋子・齋藤洋子『副島種臣』佐賀城本丸歴史館、二〇一四年)。
- (31) 長森敬斐とは幼名傳次郎、号は學稼。実父は佐賀藩士加賀伊卿、実兄は加賀権作(切米五五石、槍免状、川原小路在住、播磨組)。天保五年生れ(『日本電信の祖石丸安世』(慧文社、二〇一三年)二八二頁)。
- (32) 「叙位裁可書・明治三十五年・叙位卷八」(国立公文書館、請求番号叙0123100)
- (33) 「公文録・明治一三年・第百三十八卷・明治十三年十二月・官員(太政官)ノ県」(国立公文書館、請求番号公02769100)
- (34) 「公文録・明治十五年・第百二十卷・明治十五年三月・官吏雑件(太政官)ノ府県」(国立公文書館、請求番号公03428100)
- (35) 「公文録・明治十八年・第百五十八卷・明治十八年十二月・官吏進退(内閣)」(国立公文書館、請求番号公0403100)
- (36) 「官吏進退・明治二十年・官吏進退十五卷・司法省五」(国立公文書館、請求番号任A00141100)
- (37) 「官吏進退・明治二十四年・官吏進退一・内閣・枢密院」(国立公文書館、請求番号任A00242100)
- (38) 「枢密院文書・枢密院高等官転免履歴書・明治ノ二」(国立公文書館、請求番号00177100)
- (39) 『日本電信の祖石丸安世』(慧文社、二〇一三年)二三九頁。
- (40) 武富文之助(定保・圀南)は、文化五年(一八〇八)四月二七日、佐賀城下白山町に生れた。祖父坦堂(孝述)、父安貞(四郎右衛門)。富豪の家に生れ、一五歳で学問文芸の道に入り、中村嘉田、古賀穀堂に学ぶ。天保六年(一八三五)春江戸留学を許され古賀岡庵に入門。同年一二月明善堂(佐賀江戸桜田屋敷の学問



所)で藩主鍋島直正に『易経』を講義。天保九年父投獄の一報を聞き業半ばで佐賀に帰国。以後弘道館教諭ついで教授となった嘉永七年(一八五四)義祭同盟参加(『佐賀県人名辞典』佐賀城本丸歴史館、二〇一九年)。「安政四年役料帳」には弘道館教諭武富文之助「但老部引、一米七石充」。「文久元年、外様、役料帳」には、弘道館、一米七石充、教諭武富文之助(中野正裕「幕末佐賀藩の役料帳について―史料翻刻『年役々料書出帳』『役料帳』―佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号、二〇一二年)六〇頁。

(41) 向井次郎作は切米二〇石、安政三年(一八五六)五三歳とすると、文化元年(一八〇四)生れカ(安政年間の佐賀藩士)(『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年)。(天保一〇年)「亥八月廿五日此通安房殿御聞届」新、向井次郎作、右は横辺田代官助役依願今又被相増候事(伊藤昭弘『古文書に見る鍋島直正の藩政改革』(一)、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一八年)七一頁。天保一二年丑八月には上佐嘉代官助役となる(『古文書に見る鍋島直正の藩政改革』佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一五年)三九頁。「文久元年年役々料書出帳」には、一役料五石充、学館都検、向井次郎作(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号、二〇一二年)六〇頁。慶応二年(一八六六)二月二六日、「引痘二付、日程手伝医師名の事向井次郎作分被相達」三〇一頁、同年八月一六日、「好生館罷出相成候様向井次郎作分被相達」三〇八頁(『小城日記』にみる佐賀医学・洋学史料)後編、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一〇年)。

(42) 石丸とは、石丸虎五郎の兄、文化一四年(一八一七)二月廿六日生れ、諱安積、幼名作太郎、後に嘉右衛門と改称した。弘道館成績文学独看、茶道を嗜む。明治一七年一月二十一日没、墓所は現佐賀市西田代町本行寺。父六兵衛、物成四六石、大井樋村在住。(『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年)二三・二三九・三三二頁。

(43) 福島金岡は、切米二〇石、五六歳、本行寺小路在住、嗣子禮助一五歳(安政年間の佐賀藩士)(『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年)。享和元年(一八〇一)五月二三日、金立村生れ、諱は武雅、通称文蔵、金岡と号す。十九歳にして藩校に入り学業大に進み文政十一年(一八二八)国学指南に挙げられ、天保九年(一八三八)藩命により昌平齋に学び十二年(一八四二)帰国、教諭に任命され、間もなく病気に罹り万延元年(一八六〇)十二月辞職、在職三

〇余年、文久三年(一八六三)八月没、享年六三(『佐賀県歴史人名事典』佐賀城本丸歴史館、二〇一九年)一五〇頁。「安政四年役料帳」には弘道館教諭福嶋文蔵・武富文之助(二人共に)「但老部引、一米七石充」(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号、二〇一二年)六〇頁。

(44) 『安政三年、年役々料書出帳』に、「学館都検、石丸十作」とある(佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号、二〇一二年)五六頁。

(45) 前山清一郎は文政六年(一八二三)二月二日(明治二九年(一八九六)三月二四日。弘道館に学び、嘉永六年(一八五三)昌平坂学問所に遊学、安政元年(一八五四)江戸上屋敷(桜田屋敷)明善堂文武心遣役、安政五年(一八五八)弘道館教授補、その後小姓役兼備立役。慶応四年(一八六八)閏四月庄内援兵参謀(『佐賀県人名辞典』佐賀城本丸歴史館、二〇一九年)。切米二五石、文学独看、槍目録、古賀在住(安政年間の佐賀藩士)(『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年)。

(46) 佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号(二〇一二年)六九頁。

(47) 古賀一平(定雄)とは、天保三年(一八三二)生れ、父は佐賀藩士河内定古、母は古賀氏、義祭同盟に参加、江藤新平・大木民平と古賀一平は佐賀の三平と称された。副島種臣は、大木は知、江藤は勇、古賀は直であると評した。慶応四年(一八六八)日田御領所御用掛、武蔵県知事、明治二年(一八六九)一月徴士、七月品川県知事、同四年(一八七二)佐賀藩大参事、一月伊万里県参事、同五年宮内少丞、同六年足柄県参事、同七年名東県権令、同八年香川県権令を歴任し明治一〇年(一八七七)十一月一八日没(『佐賀県人名辞典』佐賀城本丸歴史館、二〇一九年)。

大園隆二郎『大隈重信』(西日本新聞社、二〇〇五年)二三四頁によれば古賀の義祭同盟参加は安政二年(一八五五)。

(48) 『大隈重信』(西日本新聞社、二〇〇五年)二三四頁の義祭同盟連名帳(年不明)に坂井辰之允が一番目に書かれている。「安政年間の佐賀藩士」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年)には坂井辰之允、二四歳、父佐兵衛、切米四〇石、槍免状、四三歳、古賀在住。とあるので、坂井辰之允は天保四年生れと思われる。

(49) 『日本電信の祖石丸安世』(慧文社、二〇一三年)三六八・三六九頁。

(50) 古賀一平(定雄)は病を得て帰郷、長男誕生を病床で聞き、「千年」と命名した。

千年は、定雄の願い通り九二歳まで生きた。生まれてすぐ父親を失い三歳で母親に死なれた千年は、厳格一点張りの学者の家で育てられ、結婚して六人の子を持つた。長男が寛定（山村聰・映画俳優）である。寛定はその著書『釣りひとり』（二見書房、一九七四年）の「父と釣り」の項の最後に「家系図だとか、祖父が官職についたときの辞令がある」と書いている。

(51) 空閑次郎八は、天保元年（一八三〇）生れ、祖父は山領主馬、実父は山領真武、姉駒子は佐野常民夫人。「大隈八太郎・島團右衛門・諸岡廉吉・空閑次郎八の四人は日本を維持する四柱の神だ」などと次郎八は称えた。文久二年（一八六二）病没（『大隈重信』西日本新聞社、二〇〇五年）八四頁。「安政年間の佐賀藩士」（佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号）二〇〇九年）には切米二〇石、文学独看・剣目録、二七歳、大野原在住とあるので、天保元年（一八三〇）生れと推察される。

(52) 島團右衛門（義勇）は、文政五年（一八二二）九月二日、佐賀藩士島市郎右衛門の長男として佐賀城下に生れた。母は佐賀藩士木原壮兵衛四女で枝吉神陽・副島種臣・木原義四郎と従兄弟にあたる。安政元年（一八五四）、三三歳のとき藩命で江戸遊学、同三年九月から蝦夷地探検、翌四年閏五月から四ヶ月半樺太渡島、この時『入北記』を著す。文久元年（一八六一）凌風丸建造の際御蔵方として参画（『佐賀県人名辞典』。中野正裕「幕末佐賀藩の軍制について」『元治元年佐賀藩拾六組侍着到』）（佐賀県立佐賀城本丸歴史館『研究紀要第七号』二〇一二年）によれば、古賀源四郎は郡方附役、島團右衛門は足軽二五人の組頭である。

(53) 大木喬任は、天保三年（一八三二）三月二日生れ、父は佐賀藩士大木知喬、母シカ子。通称幡六、二〇歳の頃民平、諱も知真から喬任に変えた。大隈重信は母方の従兄弟（重松優『大木喬任』佐賀城本丸歴史館、二〇一二年）一一頁。

(54) 相良宗藏とは、文政五年赤松町生れ、明治三七年一月二〇日、八二歳の高齢で没。佐賀藩の御仕物方・寺社方・町方を歴任し、明治二年の藩政改革では生き字引と言われたその知識をふるった。およそ佐賀藩に関するものは、本支藩をはじめ諸侯、諸藩士の系譜や墓碑に至るまで三百年のことを殆ど記憶せざるなしと言われた博覧強記の人物。枝吉神陽とは若い時から一緒に活動した（『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年）二二九頁。

(55) 三月一三日の書簡は相良から子息の就職を依頼された石丸の結果報告である。石丸は佐賀から帰京途上、三重県令岩村定高（神陽先生の同門、義祭同盟参加）を

訪ね相良の子息の就職を頼んだことが書かれている。

三月二六日付の書簡には、「先般帰省中略御話申上候故枝吉神陽先生建碑ノ義ニ付、早速長森ト申合セ副島先生エモ相謀、追々ニハ外ニ有志者ノ協賛ヲ請ヒ速カニ建設着手ノ事ニ決定仕候」と建碑計画が動き出したことを伝えている。七月一日付書簡では、「去月世之書留之御郵書并本月二日附御葉書両通共追々相達辱拜讀仕候、尔来倍御多祥奉敬賀候、偕ハ先便ニテ御送附被下候神陽先生履歴書之外、尚又追補の件数條御取調共記載被成下、御蔭ニ完全之場合ニ移行彼是御懇配之段不浅奉拜謝候、副島先生よりも厚ク御禮申上具様との御文ニ御座候」と、相良宗藏が調べ上げた枝吉神陽の履歴によって碑文が出来上がっていく様子が分かる（多久島澄子「英人莫理化斯と経緯舎十二」伊万里市郷土研究会『烏ん枕』七八号）。

(56) 伊東外記とは、文化三年（一八〇六）四月生れ、実父濱野藤左衛門休明（物成九五石）、母伊東元郷（足軽組頭）女、天保一三年、養父伊東元資の隠居により伊東家の家督相続。足軽組頭、請役付役、御仕組所附役、御境目方、御番役兼職。幼時は巳一郎・六郎太夫、のち次兵衛、元重、祐元、外記、号は孤雲・知足庵。三男道太郎は鍋島藤兵衛の養子となり鍋島幹（男爵・栃木県令・青森・広島県知事）と称す。弟は電流丸船長濱野源六（文政七年四月二六日生）。明治二三年（一八九〇）四月一日、八五歳の天寿を全うした。墓は佐賀市長瀬町西念寺（佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第五編第一卷、二〇〇八年）。

(57) 『佐賀県近世史料』第五編第一卷、二〇〇八年）三九頁。

(58) 石丸十作・石丸虎五郎兄弟の父、石丸六兵衛の死亡は、安政四年（一八五七）一月一四日（『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年）二九三頁。

(59) 佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』第六号（二〇一二年）六八・六九頁。

(60) 『佐賀県近世史料』第五編第一卷（二〇〇八年）五九七頁。

(61) 『佐賀県近世史料』第五編第一卷（二〇〇八年）四一頁。

(62) 大園隆二郎『枝吉神陽』（佐賀城本丸歴史館、二〇一五年）一一頁。

(63) 『日本電信の祖石丸安世』（慧文社、二〇一三年）二九三頁。

(64) 佐野寿左衛門は、文政五年（一八二二）二月二八日佐賀藩士下村三郎左衛門の五男として早津江に生れ、天保三年（一八三二）、一〇歳で佐賀藩医佐野常徴孺仙の養子となり、佐野家は日々外科を業としていたので、藩校弘道館や親戚の松尾

栄仙塾に通って勉強した。その後江戸の古賀侗庵に西洋事情を学び、京都の広瀬元恭、大坂緒方洪庵の適塾（嘉永元年中秋肥前佐嘉藩佐野榮壽、紀州の華岡青洲の春林軒塾（嘉永二年三月）、江戸伊東玄朴の象先堂、戸塚静海に学んだ。嘉永七年（一八五四）佐賀藩から医業免札を受けた（『佐賀医人伝』佐賀新聞社、二〇一八年）。

(65) 石丸虎五郎は、安政五年（一八五八）五月二五日から殆ど長崎に滞在し、海軍と英学の伝習を継続、文久三年（一八六三）には攘夷派に狙われる程の第一人者となる。慶応元年（一八六五）一〇月一七日、グラバー商会のチャンティクリア号に身を潜め長崎港を出発、同行者は佐賀藩士馬渡八郎・広島藩士村田（野村）文夫。慶応二年三月三日（洋暦）スコットランドのアバデーン着、慶応三年（一八六七）パリ万国博覧会の佐賀藩出展に解説から撤去まで尽力する（『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年） 八四・三一四・三二五頁。

(66) 馬渡八郎は、父佐賀藩士馬渡又兵衛（物成五〇石御使番）、母藤原俊（『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年）一八八頁。安政五年三月三日着崎、物成五〇石、馬渡八郎、志摩組、午二歳（『前書』三五〇頁）。文久元年（一八六一）海軍取調方助役（文久元年役々料書出帳）。慶応元年（一八六五）一〇月一七日イギリスへ密航留学の為長崎港を出発、（『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年） 八四頁。慶応四年八月頃帰国カ。

(67) 小出千之助とは天保三年（一八三三）生れ明治元年（一八六八）没の佐賀藩士、万延元年（一八六〇）遣米使節団に、慶応三年（一八六七）パリ万国博覧会に派遣された。慶応四年七月一三日藩学寮学頭、同九月一日致遠館学頭に就任するも不慮の落馬事故で死去した。小出は石丸虎五郎を見出した（『日本電信の祖石丸安世』六八・七六・一一四頁）。

(68) 村山和彦『佐賀藩幕末関係文書調査報告書』（佐賀県立図書館、一九八一年）二二七頁に、「〔異筆〕 巴里博覧会ニ関スル書面、封、九月朔日認、長崎、小出千之助、至御城、千住太之助様、急要用、封印」の別啓に、「……此節物産會之義、諸藩分ハ早巳ニ物産等の相運候都合ニ相成、御國之御存立少し手後共いたし不申哉、……略」

石丸・馬渡、幸英國ニ罷在候へ者、同人共江何れ之筋今歟御書面をも被差出、パレイス之方江出浮、物産會場所借受等、扱又諸事共致周旋候様被仰越候道共ハ有御坐間敷哉……とある。

(69) 『日本電信の祖石丸安世』慧文社、二〇一三年）一〇五頁。

(70) アンドリュウ・コピング『幕末佐賀藩の対外関係の研究』（鍋島報効会、一九九四年）一六五頁には、「小生滞留の有無等を訪ふ」とあるが、「小出滞留の有無等を訪ふ」と読んだ方が意味が通る。佐野は小出と書いたと考える。

(71) 本島藤太夫は、『佐賀県近世史料』五編一卷（二〇〇八年）に、切米四〇石内加米五石、播磨組、佐賀城下水ヶ江在住、実名方道（八八頁）。一八一〇年（文化七）生れ一八八八（明治二）没、佐賀藩士、切米六十五石内加米五石役米二十五石、誠吉郎組、手明鐘頭、御歩行二十五人組頭外二与廻（六六三頁）。嘉永七年（一八五四）一月カ、本島藤太夫は、熊本藩士を迎えた折の寄書に、方道の名で「白雪の降しく見ればおのか身に老つもるらんとし浪のはな」、「雄男か打や御国の玉の裏ニくたけぬものハあらしとそ思ふ」の二首を詠んでいる（多久島澄子「佐賀藩御鑄立方田中虎六郎の事績」『幕末佐賀藩の科学技術』上、岩田書院、二〇一六年） 三二一・三二二頁。

(72) 『幕末佐賀藩の科学技術』上（岩田書院、二〇一六年）二五五頁。

(73) 中牟田倉之助とは、安政三年二歳、米九石、蘭学四段、古賀村、鍋島志摩組（安政年間佐賀藩士）（『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年）。文久元年、一役料三石充、海軍取調方助役（佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号七四頁）。

(74) 秀島藤之助とは、安政三年二歳、蘭学四段、愛敬島在住、父権太夫二〇石、鍋島志摩組（安政年間の佐賀藩士）（『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年）。文久元年、一役料三石充、海軍取調方助役（佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号（二〇一二年）七四頁）。

(75) 中野禮四郎編『鍋島直正公傳』侯爵鍋島家編纂所、一九二一年）年表一六三頁。

(76) 鮑の浦とは、徳川幕府が海防に備え艦船建造を目的として、オランダ人技師の指導を受け、長崎出島の対岸、浦上村淵字鮑ノ浦に一八五七年（安政四）起工し、一八六一年（文久元）完成した鍛冶・工作・溶鉄の三工場からなる長崎製鉄所のこと。後の長崎造船所で、一八八七年（明治二〇）三菱長崎造船所（『日本歴史大事典』）。

(77) 鮑の浦のオランダ人ハルテスに郡内（山梨県郡内地方の高級絹織物）一反、アークンとラースコイトには白加賀（石川県加賀の織物加賀羽二重）一反ずつ、英語教師蘭人ホーゲルには特に白加賀・郡内を各一反。英学教師のオランダ人には絹

織物、英学教師・通詞三島末太郎には蠟燭十五斤、通詞の岩瀬彌四郎・横山又之丞に蠟燭十斤、薩摩藩士川南清兵衛・五代才助・加治木清之丞・鎌田諸右衛門一同に蠟燭十五斤（中村孝也『中牟田倉之助傳』中牟田武信、一九一九年）一五六頁。

(78) 『中牟田倉之助傳』（中牟田武信、一九一九年）一五五～一五七頁。

(79) 『中牟田倉之助傳』（中牟田武信、一九一九年）一五五頁。

(80) 『中牟田倉之助傳』（中牟田武信、一九一九年）一五八頁。

(81) 佐賀県立図書館には文久三年七月九日付の薩英戦争記事を翻訳した「横浜新聞紙写」（鍋島文庫鍋九九一―五七八）がある。（多久島澄子「佐賀藩の英学の始まりと発展」『幕末佐賀藩の科学技術』下、岩田書院、二〇一六年）一一一・一二二頁。

(82) 石川寛左衛門とは、安政三年五二歳、物成一二〇石、深堀在番、坂部又右衛門組（「安政年間の佐賀藩士」〔佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号〕二〇〇九年）。

(83) ハルデスは、文久元年三月五日、佐賀藩士石川寛左衛門・久保六之助・原元一郎・増田左右之進・馬渡八郎・秀島藤之助・石丸虎五郎・夏秋三兵衛・小部松五郎・中牟田倉之助の一〇人から、近々帰国するため別れの挨拶を受ける（『中牟田倉之助傳』（中牟田武信、一九一九年）一六〇頁）。

(84) 千住大之助は、文化一一年（一八一四）一月佐賀藩士田中忠左衛門賢篤の二男として生れ、二歳で同佐賀藩士千住彌啓の養子となる。幼名榮一郎、後、大之助、平之進、代之助、西亭、西翁、本名健任、通称代之助。主として藩主直正に仕え恩寵厚く内政に参画した（『佐賀藩幕末関係文書調査報告書』一九頁）。安政三年四二歳、切二〇石、文学独看槍目録、鬼丸在住、市佑組↓弥平左衛門組（「安政年間の佐賀藩士」）。佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号には、「万延元年、御小姓頭、米七石充」六二頁。「文久元年、御小姓頭、米七石充」六五頁。千住大之助は、熊本藩士を迎えた折（嘉永七年一月カ）の寄書に、妻丁の名で「自有蒸氣船 宇内無遠近 独特鎖国論 天地尚混沌」、西亭の名で「鎖国與通信 併付き一樽間 夜深宴未散 且見五湖山」の漢詩を書いている（『佐賀藩御 鑄立方田中虎六郎の事績』『幕末佐賀藩の科学技術』上、三二一・三三二頁）。

(85) 横山平兵衛は、安政三年四五歳、槍免状、物成四五石、十間堀在住、弥平左衛門組（「安政年間の佐賀藩士」〔佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号〕二〇〇九年）。佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号の六二頁に

は、「万延元年、御小姓頭、米七石充」、六五頁には「文久元年、御小姓頭、米七石充」とある。

(86) 古川與一は、「安政年間の佐賀藩士」『佐賀大学文化教育学部研究論文集第一四集第一号』二〇〇九年）には、安政三年四四歳、米一八石、八幡在住、市佑組↓播磨組。佐賀大学地域学歴史文化研究センター『研究紀要』六号六二頁には、「万延元年、御小姓頭、米七石充」、六五頁には「文久元年、御小姓頭、米七石充」とある。

(87) 現在『三兵答古知幾』は、鍋島文庫に鍋99111300/14冊、鍋99111301/30冊、鍋99111302/15冊、鍋99111303/15冊、鍋99111304/17冊が目録に挙がっている。

（佐賀歴史研究会会員・佐賀医学史研究会会員）